

不許転載

「情育」のすすめ - 心を育てる -

「情育」のすすめ - ころを育てる -

目次

はじめに	3
. ころとは何か	4
1. フロイトの精神分析理論	4
2. ユングの無意識論	5
3. 人間らしさとは	6
. 子どもの育ち方	12
1. ころはどう育つか	12
2. 望ましい育て方	14
3. 統制・自由・愛	17
. 現代っ子のころ	20
1. 子どものころに何が起きているか	20
2. 荒れる子ども	20
3. 自己肥大の宿命	22
4. いじめを考える	27
5. 不登校	30
6. 高校生の規範意識	31
. 求められる「ころ」とは	32
1. 根気のなさ	32
2. どうして根気がなくなるか	39
. 子育てと教育のストレス - どう向き合い、乗り越えるか -	46
1. 中塚のストレス尺度と自己・他己検査	47
2. 中塚のストレス研究	51
3. 木村の研究	52
4. 亀井の研究	53
. 「情育」の実現に向けて	60
1. 情動の共有	60
2. 大人の権威を	64
おわりに	69
参考文献リスト	71

はじめに

この本を読んでくださる方の多くは、おそらくタイトルについて何らかの思いをおもちになっただろうと想像しています。まず「情育」ということばが見慣れないものです。教育を分類するのに、今までよく言われてきたのは「知育」「徳育」「体育」の3つです。知育はおもに「あたま」をよくするためのもの、徳育は道徳性を高めるもの、体育は健康や体力を作るもの、ということで理解していただけるでしょう。それでは、これまで一般に言われたことがなく、これから私どもが語ろうとする「情育」とは、いったい何なのか。それは、サブタイトルにもあるように、「こころ」を育てるものなのです。私どもは、「こころ」を育てることが教育の根本であり、したがって「こころ」を育てることなしに、知育・徳育・体育などいっさいの教育は効果が上がらず、意味も持たないと考えております。付け加えれば、いま、日本の教育、そして家庭での子育てがきわめて危機的な状態にあるのは、この「こころ」を育てることをおろそかにしているからだと言えるのです。

読者の方々は、ここでまた奇妙な思いを抱かれるかも知れません。どうしてこの著者はわざわざ「こころ」とひらがなで書いて、「心」と書かないのだろうか、と。著者のきまぐれなのか、それとも単なる印刷ミスなのか・・・？ もちろんそのどちらでもなく、私どもはある信念のもとに、「こころ」ということばに特別の意味を込めています。その内容については本文にゆずることとします。

不登校、いじめ、学級崩壊、援助交際、麻薬汚染、少年犯罪、受験地獄、そして児童虐待、子殺しと、教育や子育てをめぐる現状は、ほとんど最悪といった観があります。その反面、多くの家庭が経済的に豊かになったために、さまざまな塾やおけいごとは大いに繁盛し、子どものお小遣いですぐには買えるおもちゃやゲームはお店にあふれています。おいしいものをおなかいっぱい食べさせてあげることもし、すてきなデザインの服も着せてあげられます。いつの時代も、親というのは子どもの幸せを願うものと思うのですが、現代のように複雑な世の中では、どのように子育てや教育をしていけばいいのかを見極めるのがたいへん難しくなっています。そもそも幸せというのが何なのか、子どもだけでなく大人もわからなくなっているのが、いまの状況と言えるのです。

この本は、このような思いのもとに、子どもたちの本当の幸せを願って書かれました。

。「こころ」とは何か

「はじめに」で、私どもは「こころ」ということばを特別な意味で使っていると申し上げました。言い換えれば、人間の全体的な「心」の中に、「こころ」というある部分があり、そこはいくつかの特別な働きを担っている、と考えているのです。これから先、「心」と「こころ」を、いちいちカッコ付きで使っているのは、お読みになるみなさんがわずらわしさをお感じになるかも知れませんが、ちょっとかたい表現ですが、「心」については基本的に「精神」ということばに代えていきたいと思ひます。もう一度確認しておく、私どもは、人間の精神に、こころという特別な部分と働きを想定している、ということです。

ことわり書きはここまでにして、さっそく説明に入ります。

1. フロイトの「精神分析」理論

無意識の発見と精神モデル

いきなり外国人の名前が出てきて、びっくりなさったかも知れませんが、難しい心理学の講義を始めようというわけではありませんので、ご安心ください。ただ、私どもの考えだけを説明するより、今までに人間の精神というものがどのようにとらえられてきたのかということについて、ごく簡単にでも紹介しておいた方が、より深く納得していただけるだろうという思ひがあり、このような形をとるまでです。

さて、精神というもののとらえ方について、現代の心理学と精神医学に最大の影響を与えたと言っているのが、オーストリアの医者であり学者であったジグムント・フロイト（1856 - 1939）です。フロイトの最大の功績とされるのは、人間の精神に「無意識」を発見したことです。今日、私たちはほとんど無意識のうちに（？）「無意識」ということばを使っていますが、これはフロイトが発見し、使い始めたものです。

フロイトは、目に見えない人間の精神を、目に見える「モデル」としてあらわそうとし、まず始めに「意識」「前意識」「無意識」という3つのレベルで精神を説明しようとした。意識と無意識については、だいたいことばだけでご理解いただけると思ひますので、前意識にだけ説明を加えます。私たちはふだんの生活の中で、いろいろなことが目に見えたり、耳に聞こえたり、あるいは匂いを感じたり手足に触れたり、さまざまにものごとを感じています。しかし、それらいちいちに反応していたらすぐに疲れてしまって、身体がいくつあっても足りないことでしょう。例えばみなさんがいま本を読んでいるときでも、家族の方の動きが目に入るでしょうし、隣の部屋では明かりがついたり消えたりしているかも知れませんが、おいしそうな夕食の匂いがただよってくることもありますし、外で吹い

ている風の音も聞こえてきます。私たちは前意識によって、それらのすべてを感じとることが出来ます。しかし、いま、自分に必要のないことには注意が向きませんし、反応もしないのです。ちなみに、それをコントロールするのが意識の働きです。

フロイトは、この3つによっては、精神を説明するのに不十分だと考え、次に「イド」「自我(エゴ)」「超自我(スーパーエゴ)」という3つの精神構造を考え出しました。「イド」とは、無意識的で本能的な欲望のエネルギーが貯蔵されているところ、とされています。これは、ただひたすらに快感だけを求めようとするもので、精神の奥底でマグマのようにたぎっています。この欲望エネルギーは「リビドー」と名付けられ、フロイトはリビドーを基本的に性的なエネルギーと考えました。「自我」は、それらの欲望エネルギーのうちから、現実社会や生活において通用するものだけを意識的に取り出して使う働きをします。つまり、自我が強く、しっかりとしていれば、暴れがちな欲望を抑えてちゃんとした生活ができますが、そうでなければ欲望に引きずられ、欲望のおもむくままにめちゃくちゃな生活をおくることになる、というわけです。「自我」は、両親のしつけによって本能的欲求が禁止されることにより定着していく、とされます。そうした自我は、成長にしたがい、次第に「道徳」や「良心」として、本来の自我から切り離されて独自に存在するようになります。それが「超自我」です。フロイトは、こうした自分の考えについて、イドを暴れ馬に、自我を馬の騎手にたとえています。そして超自我は、自我に対する裁判官の働きをしております。

フロイトは神経症やヒステリーの研究と治療でもっとも有名と言えますが、なぜそのような症状が現れるのかというと、意識に受け入れられないために無意識に押し込められているいろいろな欲望が、何かのきっかけで噴き出してしまい、それが身体の症状と結びついてしまう、と考えられています。したがって、こうした症状を治すには、無意識を抑えている意識、特にそのうちでも一番上に重しのように乗っかっているとされる「超自我」の働きを弱める、あるいは取り除くことが有効であるとされます。それはつまり、道徳や規範に縛られない生き方をさせようとする事です。これが、「精神分析学」の基本的な考え方であり、今日の精神科治療は大多数がこの考えにもとづいています。

2. ユングの無意識論

フロイトとの決別

カール・ユング(1875 - 1961)は、スイス生まれ、チューリッヒ大学で精神医学を研究しました。そして1907年にフロイトと知り合い、ともに国際精神分析学会を創設して、その初代会長となります。しかし、考え方の違いから6年後には早くもフロイトと決別します。

考えの食い違いは、おもにふたつの点にまとめられます。ひとつは、フロイトがリビドー（本能的な欲望エネルギー）を性的なものに限定して考えたのに対し、ユングはもっと広い精神的エネルギーとすべきだと主張したことです。もうひとつは、無意識に関する考え方で、フロイトは無意識をあくまでも個人的なものと考えていました。これに対し、ユングは無意識をふたつに分け、「個人的無意識」と「集合的無意識」を考え出しました。集合的無意識は、個人的無意識の下に位置するものとされ、人類全体、あるいは動物にすら共通した心の基礎であると、ユングは言います（少し付け加えておきたいのですが、私どもはユングと違い、人間と動物が精神的共通性を持っているとは考えていません。その理由と根拠についてはこの後に述べます）。集合的無意識は、個人個人が持っていると言うより、すべての人間に遺伝的に伝えられているものだと考えられるのです。ユングはこの考え方を実証するために、世界中の神話や民話、昔話を研究し、そこにある共通性を根拠として示しました。また、精神科医としてのユングは、精神分裂病という心の病を多く扱いましたが、この病気の重要な症状として「妄想」が起こるといふものがあります。例えば、見えないものが見えてしまったり（幻視）、何かを命じる声が聞こえてきたりしてしまう（幻聴）のです。この妄想の体験は、患者さん全体の症状を見ると、ある程度の共通性があります。ユングは、その共通性を、集合的無意識の根拠として述べたわけです。

3. 人間らしさとは

人間と動物の違い

フロイトとユングは、ともに精神医学・心理学における20世紀の巨人と称されます。簡単にすませるつもりが、少しばかり長引いてしまって、退屈された方もいるかも知れません。最後に紹介するのが、私どもの人間精神に対する考え方です。

唐突ですが、みなさんは、人間と動物とを分ける、最大の違いは何だとお考えになるでしょうか。あらゆる生物の中で、人間だけが2本足で立って歩き、空いた両手を自由に使えるようになった、したがって2足直立歩行こそ、人間と動物とを分かつものだ、生物学的には、このようなことが言われます。これは確かに間違いではないでしょう。しかし、ちょっと考えてみなければならないことがあります。もうお気づきかもしれませんが、病気や事故、何らかの障害などによって歩行の自由を失ってしまった人が、世界には大勢いらっしゃいます。そうした人々は、同時に人間らしさも失ってしまっているということになるのでしょうか。断じてそんなことはありません。2本足で立って歩くというのは、人間を「ヒト」という生き物の一種として見れば、明らかな特徴であると言えますが、それが人間性の本質をなすとは、とうてい考えられないということになります。人間性の本質、人間の人間たるゆえんは、肉体的な特徴にではなく、やはり精神的なものに求めなければ

ならないでしょう。

人間の精神

そうなると思っ先に言われるのは、おそらく人間だけが自在にことばをあやつり、文化を生み出し、文明を発展させることができる、こういうことだろうと思います。確かにこれも、全面的に間違いであるとは言えません。しかしこの点についても、少し慎重に考えてみたいと思うのです。

チンパンジーにことばを教えることを研究なさっている方々がいることは、大勢の方がご存じだろうと思います。テレビや雑誌でよく紹介されますし、小学校で使われる国語の教科書にも、この話がとりあげられています。最初に断っておきたいのですが、私どもはこの研究がいいとか悪いとか、意味があるとかないとか、そういうことをここで論じるつもりは毛頭ありません。ただ、人間らしさとは何か、ということを考えるためのきっかけとして、紹介させていただいているまでです。

生物学や生態学、あるいは言語学やコンピューター工学など、さまざまな学問が発達してきたおかげで、チンパンジーに人間のことばを使わせて、かなり高度なコミュニケーションをとらせることが可能になってきました。セーターを着て、いすにちょこんと腰掛け、キーボードを叩くチンパンジーの姿は、ほほえましく、かわいらしいものです。幼い子どもを見ているような気になることすらあります。このチンパンジーは、限りなく人間に近づいているのでしょうか。もはや彼と人間とをへだてる垣根は、ほとんどとれるところまでできたのでしょうか。「チンパンジーほど人間らしい生き物はいない」と語る人もいるそうで、確かにこうした場面だけ見れば、そういう意見にもうなずきたくなくなってきます。

もうひとつ、サルについてのエピソードで、多くの人の同情をさそうものがあります。ニホンザルの母親は、おなかに赤ちゃんをしっかりとしがみつかせています。片時も離れることのない濃密な母子関係は、時おり「人間もサルを見習え！」と言われるほどです。その愛らしいサルの赤ちゃんが、不幸にも何かの原因で死んでしまうことがあります。しかし、母親は、愛するわが子が死んだことを認めません。死んだことがわからないのでしょうか、それとも愛するあまりになきがらを手放すことができないのでしょうか。ぐったりと動かない小さな遺体を、いつまでも抱き続けます。それを見た多くの方は、サルの母親の愛情深さに心を打たれます。サルの子育ての姿勢を見て、人間の子育ての反省をします。人間に最も近い生き物であり、人間の直接の祖先であるサルは、本当に人間以上に人間らしいのでしょうか。

実は、人間だけにあってサルには絶対にはないものが、確かに存在します。別に、人間が優れていてサルは劣っていると言いたいわけではありません。両者を決定的にへだてる違いが、厳然と存在する、これは事実なのです。

それは何でしょうか。「人間はコンピューターを作れるけれど、サルはそれを使うだけ」

いやいや、そうではありません。それは、文化とか文明とかいうことではないのです。そうではなくて、自分以外の他者がいることを考え、その立場を思いやり、やさしくしてあげたい、助けてあげたい、何か分けてあげたいと思う気持ちなのです。ここで、「ちょっと待った！」という声がかかるかも知れません。ニホンザルの母親は、これ以上ないくらいわが子にやさしいじゃないか、死んだ後まで抱き続けているんだぞ、こんなマネが人間にできるか、生きていた我が子をいじめること人間すらいる、本当にやさしいのはどっちだ・・・、と。

冷酷なことを言うようですが、サルが死んだ我が子を抱き続けるのは、動物的な本能にもとづいた行動であるにすぎません。その証拠に、一定の時期が過ぎると、まるでスイッチが切れてしまったかのように遺体を投げ捨て、その後は振り返りもしません。遺体を手厚く埋葬し、時々思い出しては花を摘んできて供え、冥福を祈る、こういうサルがいるでしょうか。決していません。動物の親子愛や仲間同士の連帯は、すべてが自分自身が生き延びるための必要性から出た、本能的な行動です。しかし、同じような行動でも人間の場合は違います。あらゆる生き物の中で人間だけが、本能とは別に、他者を求め、他者を愛する気持ちをもっているのです。これこそが人間と動物とを分ける決定的な違いであり、つまりは人間性の本質、人間の人間たるゆえんと言えるものです。先ほどユングと私どもの立場は異なっていると申し上げておきましたが、その中味はこのようなことです。

右脳と左脳

どうして人間だけが、他者への思いやりをもつようになったのでしょうか。それは、人間の脳が右と左に分かれ、それぞれ違った働きをするようになったことに原因があると考えられています。右脳・左脳ということばをご存じの方は多いと思います。左脳はコツコツ暗記したり、順序よくものごとを考える働きをして、反対の右脳は、直感的なひらめきや芸術的センスを担っている、だから個性豊かな子どもに育てようと思ったら、右脳を開発する教育を小さいうちからすることだ・・・。しばらく前にはこんなことを書いた本が多く出され、かなり売れたこともありました。まあ、その善し悪しはとりあえずおいておくとして、そんなことから、脳には左右があることが一般にも広く知られるようになりました。

しばらく前に亡くなりましたが、ノーベル賞も受賞した脳生理学者で、その分野では世界一有名と言ってもいい、オーストラリアのジョン・エックルスという人がいます。日本人の学者でも、エックルスのお弟子さんだった方が大勢いらっしゃいます。エックルスは晩年、「自分は、人間にとって自己意識とは何かということをも明らかにしたくて、脳の研究にたずさわってきた」と書いています。脳を究めることで、人間性の本質を明らかにしようとしたと言えます。

エックルスは研究を通じ、動物から人間への進化における最も重要な出来事は、左右の

大脳半球に働きの違いが生じたことだ、という説を発表しました。脳が左右に分かれ、それぞれ違う働きをするようになったことにより、人間は、それまでの動物にはなかった「精神」をもつようになったのです。歴史的な進化の過程でこれが起こったのは、今からおよそ9万年前頃ではないかと考えられています。

自己と他己

大脳が左右に分かれることにより、人間特有の精神が生まれたということは、人間は「ふたつでひとつの心」をもつようになった、と言い換えることもできます。ひとつは、ひたすらに他者を求め、愛する心です。この心は、自分の都合や好みに優先します。人様を助けたい、何かの役に立ちたい、人と一緒に生きていきたい、ただそれだけを考えて、行動しようとする心です。もうひとつは、人のことにはかまわず、とにかく自分自身が生き抜くことをどこまでも追求しようとする心です。人間の精神は、このふたつの心が合わさったものと考えられます。私どもは、心理学上の研究の必要性から、人を求める心を「他己（たご）」、自分を生かそうとする心を「自己」と名付けて使っています。この本でも、今後は短く言い表せて便利なので、この他己と自己ということばを使っていこうと思います。自己ということばは、別に心理学の研究でなくても、ごく普通に使われています。自己主張、自己実現など、「自己」のついたことばはたくさんあります。これに対し、「他己」ということばには、普通、ほとんどなじみがありません。実は、鎌倉時代に曹洞宗を開いた道元禅師はこのことばを使っているのですが、このように非常に特殊なことばです。しかし、自分を生かそうとする心としての「自己」の対（つい）になる心があることが、大脳の研究からも明らかになった以上、対応するものとして「他己」を位置づけたいと考えるのです。

自己と他己のふたつの心があることを抜きにしては、人間の精神を正しく理解することはできません。先ほどもいいましたが、人間が他者を愛するのは、決して自分に都合がいいからという理由だけではないのです。人間以外の動物が仲間を尊重するのは、その方が自分が生き延びるのに都合がいいからです。そして、「都合がいい」などと自覚することもなく、本能的な行動としてインプットされているのです。

心理学の研究においては、他者をひたすらに求める行動を「愛他（利他）行動」と呼びます。人間の愛他行動をどう理解するかということは、いままで心理学上の難問とされてきました。他者を尊重した方が自分にも都合がいい、という動物を考える際の原理をそのまま人間に当てはめようとしても、どうしてもうまくいかないのです。この悩みは、いまでもほとんど解決されていません。しかし、すでに申し上げましたように、生物学的に見ても、人間だけに左脳と右脳の働きの違いがあり、そこから他己と自己というふたつの心が生まれているのであって、それが人間の間人たるゆえんなのです。動物の原理で人間を理解しようとしても、わからないのは無理もないのです。人間を理解しようとするならば、

人間にあった原理で考えなければなりません。サルを研究なさっている方々を低く見るわけではありませんが、サルを研究しただけでは、人間がわかることは絶対にはないのです。

20世紀の巨人であるフロイトとユングの理論を振り返ってみると、フロイトの説が完全に自己だけを対象としたものであることは、ユングの批判もあって明らかです。では、フロイトを乗り越えようとしたユング自身はどうだったのでしょうか。確かにユングは、「集合的無意識」というものによって、個人を超えた、人類すべてに共通した心を考えようとした点において、きわめて重要な役割を演じた人であったと言えます。しかし、ユングはそうした心を、夢や幻覚、神話や伝説を通じて明らかにしようとしていたので、現実社会に生きている人間の精神を正しく理解し、人々の幸福を実現するためのものとしては、大きな限界があったと言わざるを得ません。ユングの考えは、自己を超えようとしながらも、結局他己にいたることがなく、再び自己の中に帰り、そこに閉じてしまったのです。

少々厳しい批判であり、フロイトやユングをご存じの方には異論もあるかも知れませんが、この話はとりあえずここまでにしておきたいと思います。

精神のつくりとはたらき

さて、もう一度話を戻しますと、人間には自己と他己というふたつの心があり、このふたつでひとつの精神をなしていると考えられます。大きな駅ビルなどですと、例えば駅舎とデパートがくっついてひとつの建物になっている場合があります。ちょうどあんな感じを想像していただければいいのではないのでしょうか。

そしてまた、人間の精神も建物のように、いくつかの階があると考えられます。地下に埋まっているのは、フロイトも言ったように無意識です。地上からは見えませんが、確かに精神の基礎をなして、その上の意識をしっかりと支えているのです。

精神の一階部分、これこそが実はこの本のテーマである「こころ」です。そして、さきほど駅ビルに例えましたように、こころには自己のこころと他己のこころという、ふたつがあります。たびたび心理学のことばを使って、読む方は「またか」と思われるかも知れませんが、少しだけお付き合いください。私どもは、自己のこころを「情動」と呼んでいます。これは何かというと、まず喜怒哀楽の気持ちです。それから快（気持ちいい）不快（気持ち悪い）というのがあります。これらの気持ちはぱっとあらわれてすぐに変わってしまいますが、もう少し長続きする、例えば明るいか暗いかといった、気分というものもあります。それから忘れてはならないのが、さまざまな欲望です。まずは食欲です。食欲には、物欲や金銭欲も含まれます。次に性欲があります。これには、長生きしたいという気持ちや、自分の子どもや孫が未永く生きていって欲しいと願う気持ちも含まれます。あと、優越欲というものがあります。食欲と性欲は動物にもありますが、この優越欲は人間だけがもつ欲望です。人から偉いと思われたい、出世したい、名誉を得たい、他人をやっつけたい、などと思う気持ちです。なんだかこう並べてくると、欲望というのは悪いものば

かりで、そうしたものをもつのはいけないことのような気がするかもしれませんが、決してそうばかりでもありません。欲望を全部否定したら、人間には死ぬ道しかのこされていないからです。大事なのは、欲望をもたないことではなく、それに振り回されないことだと言えます。

さて、他己のころはどうなっているのでしょうか。こちらは、自分の都合はいっさい考えない、ひたすらなやさしさや思いやりです。自分はどうなっても相手に尽くしたいと思うのが他己のころで、これを私どもは「感情」と呼んでいます。「すぐにカッとなりやすい、感情的な性格」などと、この感情ということばはいままでもよく使われてきましたが、そのわりに「では感情とは何なのか」ということになる、はっきりした考え方はありませんでした。私どもはこれを、他己のころを表すものとして使うことを勧めたいと考えています。この「感情」は、人を思いやり、人の喜びはわが喜び、人の悲しみはわが悲しみとして感じるころです。こうした意味で、この感情を「人の心（つまり他者の精神全体）を感じるころ」とも名付けています。この「人の心を感じるころ」こそが、あらゆるものの中で、人間の人間たるゆえんと呼ぶのに一番ふさわしいと言えます。

ずいぶんといろいろな説明をしてきましたので、ここで一度整理しておきます。ころとは、自己の情動と他己の感情を指します。したがって、「ころを育てる」とは、この情動と感情を豊かにすることです。とくに、人間らしさを育てようとするれば、人間にしかない他己の感情を育てることを、一番大切にしなければなりません。タイトルにした「情育」とは、情動と感情、どちらにも含まれている「情」の字をとったものです。情動と感情はふたつでひとつですから、いくら感情を育てようとしても、情動の豊かさがなくては、感情も育ちません。この点のくわしい説明は、また別の章で述べたいと思います。

それから、2階以上の部分がどうなっているか、少しだけ説明を加えておきます。ころの上には、肉体に関する精神の働きを担う部分があり、これは「ころ」に合わせた表現で「からだ」と呼んでいます。その上には頭脳に関係した「あたま」があります。さらにその上には、あたまとからだところの、すべての階をコントロールするところがあり、そこは「たましい」と名付けています。からだにもあたまにもたましいにも、もちろん自己と他己があります。これ以上のくわしいことに興味がおありでしたら、ぜひ巻末に載せました「参考文献」をご参照ください。

・子どもの育ち方

1. ころはどう育つか

自己の成長・他己の成長

自己と他己両面からなる、ころ・からだ・あたま・たましいすべてが一体となって、それぞれの「その人らしさ」つまり人間性や性格があらわれるわけですが、それは、成長の過程で、どのように形作られていくのでしょうか。順序を言えば、ころ からだ あたま たましいの順になっています。ころを抜きにして体を鍛えようとしたり、知能を高めようとしたりしても、絶対に無理です。この点はあとでもう少しくわしく考えると、ここでは、自己と他己の育ち方を述べてみたいと思います。つまり建築工事で例えれば、ふたつの棟が同時進行で作られていくのか、優先順位はあるのか、ということです。子どもの成長は、受胎とともに始まります。受精卵のうちから、人間としての成長が始まるのです。お母さんのおなかの中で、子どもの身体はぐんぐん大きくなっていきますが、精神の成長の方はどうなっているのでしょうか。

おなかの中の胎児は、すべてをお母さんにゆだねています。当たり前のことを言うようですが、自分から食べ物をほしがったり、気持ちいいことや悪いことを訴えてくることはありません。すべて、お母さんのなすがままに生きているのです。お母さんから送られてくる、生きるために必要な全部のことを、何も言わず、一方的に受け取るだけです。ここで、胎児は他己だけで生きていると言えます。自分自身で生き延びようとする自己の働きは、まったくありません。他己だけが、静かに、すくすくと育っていつているのです。

およそ10ヶ月の後、いよいよ出生です。生まれ落ちるとほとんど同時に、赤ちゃんは小さな身体をいっぱいにするわけて泣き出します。それは、自己の成長が始まる、元気な合図でもあります。これから歩き始めるまでのおよそ1年間、赤ちゃんは、おなかがすいたとっては泣き、おむつが濡れたとっては泣き、気持ちがいいとっては笑い、眠いとっては泣き、といった具合に、生きるためのすべてを親に要求します。それは、おなかの中にいたときとは正反対の、赤ちゃんから親への一方的な要求です。ここは、自己がぐんぐんと伸びる時期です。

1歳を過ぎる頃、多くの赤ちゃんがよちよちと歩き始めるようになります。おっぱいがほしいと泣く時間は、だいぶ間があくようになり、おむつ替えもそうひんぱんではなくなるなど、生活のリズムが作られてきました。これから2~3歳までの間は、離乳や歩行、おしっこやうんち、歯みがき、食事、お話など、基本的な生活の習慣が確立していく時期です。ここでは、親の愛情あるしつけを受け入れることによって、他己が育っていきます。

さて、素直でかわいく、親の言うことをよく聞いて、何でも大人のマネをしていた子ど

もですが、2歳の後半から3歳を過ぎる頃になって、なんだか様子が変わってきました。「こうしてごらん」ということばに素直に従わなくなったり、「いや」「やだ」と言うことが多くなって、何でも自分のやりたいようにし始めます。思い通りに行かないと、怒ったりすねたりするようにもなりました。第1次反抗期がやってきたのです。これから6~7歳頃までは、どちらかと言えば親から離れたがり、自分の思い通りにものごとをしたがります。その中でいろいろな体験を重ね、自己を育てていくのです。

このまま大きくなったらわがままなだけの子どもになってしまいそうですが、そこは実にうまくできていて、小学校に入る頃、再び親や大人の言うことをよく聞く時期が訪れます。フロイトは、小学校時代の6年間を「潜在期」と呼びました。自己主張することが少なく、精神的に安定した時期だということです。学校の先生や親の教えや導きに素直に従い、他己を育てていきます。

中学校に入る頃、もう一度自己が強烈に育つ時期がやってきます。いわゆる第2次反抗期です。体が大きくなり、第2次性徴があらわれ、ある程度の精神的成長も経験してきているので、第1次反抗期と比べものにならないくらい、大人（とくに親）への独立の要求や反発心、攻撃性は強烈です。口数が少なくなり、顔を合わせるのを嫌がったり、自分の部屋に閉じこもりっぱなしということもあります。こうした傾向はだいたい26~27歳くらいまでの、青年期全般にわたって続きます。

青年期のあと、ついに子どもたちも大人の仲間入りです。それまで、子どもの精神は、自己と他己の間を大きく揺れながら成長してきましたが、大人になって、その揺れは子ども時代ほどには目立たなくなり、社会に適應した、安定した人間性となってくるのです。さて、子育ての経験のある読者の方々は、ここまでお読みになって、どういう感想をお持ちでしょうか。お子さんは、だいたい私どもが申し上げてきたような過程を経て、大きくなって来られたでしょうか。それとも、かなり違っているでしょうか。それからもう一つ、ご自身の子ども時代を思い返して見られたとき、私どもの説明とだいたい一致していたでしょうか。

精神成長の異変

ある程度の個人差はあるものの、私ども自身の子育ての経験、それから研究と教育の経験と成果に照らしてみると、子どもの精神が、ここに説明したような過程を経て、自己と他己の間を揺れながら成長してくることは、ほぼ確実です。

しかし、しかしです。現代の子どもたちに、この考えに合わない状態があらわれてきているのです。それもひとつやふたつの現象ではありません。恐るべき、と言ってもいい事態が、続々と明らかになっています。読者のみなさんも、ある程度の予想はつくかも知れませんが。その実態を明らかにし、それに対する有効な手だてを提唱するのも、この本の重要な役目ですが、そこへいく前に、子どもの精神成長にあった、親の養育態度の望ましい

あり方について、私どもの考えを申し上げておきます。

2. 望ましい育て方

【胎児期】

胎児の頃の子育ては「胎教」と呼ばれます。胎教については、病院の母親・父親学級で教えてもらえたり、実にさまざまな本が出版されたりしています。しかし、胎児期は他己が育つときなので、それにあつた親の態度が要求される、というような形で述べられたものは、いままでにまったくなかったと言えます（他己ということ自体、私ども以外に言っている人がいないのですから、当然でもあります）。そうであっても、現在胎教に関して言われていることは、そのほとんどがほしい正しいものであると考えてよいと思います。おなかの赤ちゃんにとっては、お母さんが自分にとっての環境のすべてであり、栄養にしても何にしても、そこから一方的に受け取るだけで、自分の思いでできることはひとつもないのですから、お母さんが赤ちゃんにとってよいと思われることをすべて整えてあげなければならないのは、当然のことです。

タバコやお酒をひかえなければならないのは当たり前ですし、肉体的・心理的に強いストレスがかかることも、できる限り避けなければなりません。お母さんがいつも楽しい気分で、おだやかに過ごしていられることが、おなかの赤ちゃんにとってぜひとも必要なことです。そしてこれはもちろん、お母さん一人の努力でできることではありません。お父さんの理解と協力が、どうしても必要です。

話が脱線しますが、ここでひとつ、笑えないエピソードを紹介します。ある若い女性が妊娠し、お医者さんへかかり始めました。このお母さんは大の愛煙家で、いつでもタバコが手放せません。お医者さんはこの様子を見て、おなかの赤ちゃんに悪い影響があるし、生まれたあとでもニコチンが母乳に出てくるので、タバコはやめるようにお母さんに話したそうです。するとこのお母さん、あっさりと「じゃあ、やめます」と返事しました。反発されるのを覚悟していたお医者さんは、ちょっと拍子抜けしましたが、案外説得が簡単にすんだので、一安心しました。しかし、お医者さんが喜ぶのは早かったのです。このお母さんが「やめます」と言ったのは、「タバコをやめます」ということではなくて、「母乳をあげるのをやめて、ミルクにします」という意味だったのです。

お母さん、そしてお父さんにも、この時期にはおなかの赤ちゃんを第一に考えて過ごしていただきたいと思います。

【乳児期 誕生～1歳くらいまで】

ここは、最初に赤ちゃんの自己が育つ時期です。誤解のないように申し上げておきます

が、自己が育つときであっても、もちろん他己が全然育たないと言うわけではありません。それぞれの時期で両者を比べたときに、比較的どちらかがより充実される傾向がある、と言っているのです。

ここでは、親がいっさいを赤ちゃんに合わせてあげる必要があります。赤ちゃんは、自分の力では周りに合わせる事がほとんどできないからです。犠牲、と言うと反発心を感じる読者の方もいらっしゃると思いますが、親はこの時期、まさに犠牲的精神と深い愛情をもって、献身的に赤ちゃんの世話をしあげなければなりません。「あれもしたい、これもしたい」という親の思いは、とりあえず引っ込めておく必要があります。こんな風にと書くと、この本の著者は二人ともオトコだから、育児は全部オンナに押しつけるつもりネ、どうしてオンナだけ子どもの犠牲にならなくちゃいけないの、と、女性の読者の方が怒り出すのかも知れません。もちろんそうではないことを祈っていますが、私どももお母さんにすべてを押しつけようなどとは、全然思っていません。お母さんが、安心して子育てに力を注げるよう、お父さんは環境作りに最大限努力すべきですし、お父さん自身も子育てを積極的に分担すべきです。

もう一つ、この時期には、赤ちゃんが何をしても、決して怒ってはいけません。ミルクを吐いても、いつまでも泣きやまなくても、夜寝なくても、おしっこやうんちがおむつから漏れてしまっても、ぐっとこらえて、いつでもにこにこことお世話をしあげてあげする必要があります。赤ちゃんに怒っても、何一ついいことはありません。せっかんなどもってのほかです。「子どものオシりはたたくためにある」などと雑誌に書いた人がいましたが、とんでもない暴言です。

ただでさえ子育てはお母さんにとって重労働なのに、ここでまた「怒るな」などと要求を重ねると、お母さんによってはイライラとストレスで、心はもう爆発寸前、ということもあるでしょう。ここをうまく乗り越えていくためには、またまたお父さんの出番です。赤ちゃんはこのような、両親の愛情あふれた献身的な世話を受けることによって、自分は他者によって、かけがえのない人間としてしっかり支えられているという、「自己を信じる気持ち = 自己信頼感」を育てるのです。

【幼児期 1歳頃～2・3歳頃】

自己成長期を通り、胎児期に続く2度目の他己成長期に入ってきました。先に述べましたように、ここは基本的な生活上のしつけをほとんど完成させる時期です。他己期においては、子どもは基本的に他者や社会に向けていて、「自分でどうにかする！」とがんばるよりも、他者を頼り、他者にまかせる傾向があります。そして、お父さん・お母さんや保育園の保育さんなど、権威のある大人と自分との一体感やつながりを求めています。無理にそういう性格を作ろうとしなくても、子どもは自然にこうなってくるのです。

反対に言えば、子どものこういう傾向があるからこそ、大人は生活の基本的なことから

を、子どもにしつけることができるのです。この時期においては、お父さん・お母さんや保母さんは、大人中心の態度で子どもを統制し、権威をもって「こうあるべきだ」という価値へ導いてあげます。そうして、子どもの、愛情を求める心、頼りたい心などを満足させながら、無理強いではなく、しつけを達成できるように努力するべきです。しつけができたとき、子どもの心には「他者を信じる気持ち＝他者信頼感」が育ってきます。

この時期の子育てのキーワードは、「統制」であることを確認しておきたいと思います。

【幼児期 2・3歳頃～6・7歳頃】

2度目の自己成長期で、いわゆる第1次反抗期です。子どもの関心が向く方向は、他者や社会から、自分自身へと変わってきます。ここでは、お父さん・お母さんはできる限り子どもの自由を尊重し、子ども中心の態度で、子どもが「自分でできた!」という喜びを味わえるように援助をしてあげることが大切になります。そうすることによって、子どもは自分から進んでものごとをしようとする自律性(自立、ではないことにご注意ください)、主体性、能動性などを養うことができます。そしてまた、できるかぎり自然の中で、土や木や草花、生き物などにふれ、のびのびと体を動かすことが望まれます。大人はできるだけおおらかな姿勢で、やさしく包み込むように接するべきです。

この時期のキーワードは「自由」です。

【児童期 6・7歳頃～12・13歳頃】

3度目の他己成長期に入りました。過去に問題があった子どもは、この時期に入っても、自己信頼感、他者信頼感、自律性、主体性、能動性などが十分に確立されていないことがあります。その場合には、比較的安定していると考えられるこの時期にも、いろいろな問題行動が起こってくると考えられます。しかし、そうした子どもたちであっても、この小学校の6年間を大人の適切な対応で過ごせば、精神的な健康を取り戻すことは十分に可能です。こわいのは、「三つ子のたましい百まで」ということわざにしたがって、3歳くらいまでの時期をがんじがらめにしつけで縛り上げ、「やれやれこれで一丁上がり」とばかり、その後放任主義に走ってしまうことです。いままで繰り返してきましたように、子どもは相当長い成長の過程で、自己と他己の間を揺れながら大きくなっていきます。幼いうちにしつけを完成させようと焦り、そのあと放りっぱなしにしてしまうのでは、必ずと言っていいほど、後に成長のゆがみがあらわれてきてしまいます。

この時期に子どもの精神が不安定になったとき、大人に頼りたがる場合にはその心を満たしてやって、正しい価値を実現できるように励ましてあげます。自由をほしがる場合には自由を認めてあげ、自分の意志で行動し、その結果に自分で満足感を覚え、「できた!」という喜びを味わえるように援助をしてあげます。そうすることで、自己信頼感も、他者信頼感も、自律性も、主体性も、能動性も育っていくのです。

また、この時期は他己成長期ですから、それに見合った育て方もしなければなりません。ここで、お父さん・お母さん、学校の先生がしなければならないのは、大人の社会的な価値を、子どもに実際に体験させることです。つまり、人は他者のために自分を抑え、我慢しても何かをしてあげなければならないのだ、ということをも身をもってわからせることです。つらくてもそれに耐えて働かなければならない、あるいは、自分は我慢しても人のためにつくさなければならない、それでこそ自分自身が「善い人」になっていけるのだということをつらさをわからせるのです。子どもは、さまざまな労働やお手伝い、他者への奉仕を通じて、人間が勤勉でなければならないことを学んでいくのです。

【青年期 12・13歳頃～26・27歳頃】

最後の大きな自己成長期で、第2次反抗期です。これまでの経験をすべてひとまとめにして、大人への仲間入りの準備をする、きわめて重要な時期です。ここに来るまでに適切な精神的成長がなされていないと、この時期にそれを取り戻すのは、非常に困難です。不可能とはいいいませんが、小学生時代に同じことをするのに比べると、何倍ものエネルギーと、工夫と、実力が要求されます。現代の若者に対する大人たちの嘆きの声が、それをよく表していると言えるでしょう。

この時期の子どもは極端に大人から離れたがり、関心が強く自分に向いていますから、ここで大人が子どもに対して取るべき態度は、あれこれ具体的な指図やしつけをすることではありません。それは児童期までに卒業していなければならないのです。そうではなく、子どものよき理解者となり、大人みずからが手本を示すことです。それによって、子どもは自己の志望や進路を、自分で決定することができるのです。

3. 統制・自由・愛

愛が基本

いままで説明してきたような子育てがなされれば、精神的にバランスのとれた子どもが育つことを、私どもは確信しています。それぞれの時期の子どもの姿に合った、望ましい養育態度を説明してきたのですが、すべての時期をつらぬいて大人がもつべき、基本的な心がまえがひとつあります。それは、子どもへの純粋な「愛」です。

親が子どもを愛するのは当たり前、と言われればそれまでなのですが、その愛が、実は親のエゴにとって代わってはいないでしょうか。エゴということばが堅苦しすぎるならば、こう考えてみていただきたいと思います。現代の子育てにおいては、子どもたちの健やかな成長より、親の楽しみや欲求が大事にされてはいないでしょうか。「そんなことはない！」と、力強く言い切れる読者の方々ばかりならば、あまり言うことはありません。し

かし、例えば、書店に山積みになっている子育て雑誌を思い浮かべていただきたいのです。そこで扱われている内容のほとんどすべてが、子育てを、いかに「親が」楽しむかという基本的な姿勢で書かれていると言えます。雑誌を批判してこの本の売り上げを伸ばそうなどという、イジキタナイ考えで申し上げているのではなく、事実を言っているのです。また、親が楽しみや喜びを感じることを悪いと言っているのでもありません。しかし、それはあくまでも、子どもが「善い人間」に育ったことを喜ぶ気持ちが根底にあるのが普通なのであって、よその子よりちょっとかわいい顔みたいだとか、親の果たせなかった夢を子どもが実現してくれたとか、いい学校に入れたとか、いい企業に就職できたとか、お金をたくさんかせいでくれるとか、親をラクさせてくれるとか、こういったようなことを楽しみとして子育てをするのであれば、それは子どもの幸せより、親自身の幸せを優先させていると言えるのです。そこにあるのは親としての「愛」ではなく「欲望」だけです。

子どもに与える親の愛とは、親が「自分」を捨てた愛でなければなりません。親自身を犠牲にした愛でなければなりません。動物は、本能的行動として、子どものために自分を犠牲にすることができます。自分自身が死んでも、子どもが生き延びれば、「種(しゅ)」は保たれたことになるからです。しかし、自己と他己というふたつの心をもった人間は、本能によって自分を捨てることはできません。「人の心を感じるころ」である感情を最大限に働かせ、さらにはその下に埋もれた無意識を磨き出すところまでいかなければ、たとえ我が子が相手であっても、本当に自分を捨て、ひたすらに愛を与えることは難しいのです。どうしたら無意識を磨くことができるのかということについては、いつかまた別の機会に申し上げることにし、ここでは、われわれ人間は意識して「人の心を感じる」ように努力し続けなければならないことを強調しておきたいと思います。

日本人の精神

日本人は元来、この「人の心を感じるころ」がたいへんに豊かな民族でした。「困ったときはお互いさま」とか、「以心伝心」とか、「ツーカーの仲」とかといった、こころとこころの結びつきを表すことばが、たくさんあります。それから、いまから 1,300 年前の飛鳥時代に、聖徳太子は「和をもって貴(とうと)しとなす」と言って、社会の基本は「和」だと考えました。「和」とはまさにこころとこころのつながりを一言で表したことばです。これは聖徳太子のオリジナルなアイデアではなく、もともと古来の日本人にはそうした思い(つまり私どもの言う感情)が豊かだったと考えられます。

われわれの祖先にとって、お互いに思いやり、譲り合い、助け合って生きるのは、わざわざ言うまでもない、ごく当たり前のことだったのです。しかし、明治時代以降、欧米の民主主義・個人主義の考え方がどっと入ってきて、こうした考え方はだんだん軽んじられるようになりました。そして終戦後には、その傾向が決定的になったと言えます。いまでも、「和」を重視する日本人と言え、何となく悪いイメージがあるのではないでしょう

か。個性がなく、自己主張ができず、いつも群れていて、さっそうとしたところがなく、国際社会では全然通用しない、ダメな日本人、「和」ということばには、どうもこんな意味合いばかりが定着してしまったようです。

しかし、日本人が「和」を捨てたというのは、こころとこころのつながりも捨ててしまったということなのです。そのために、われわれの生活から、どんどん「愛」も失われています。自分を大切にする「自己愛」ばかりが、愛になってしまっているのです。こうした傾向は、残念ながら子育てや教育にも、きわめて悪い影響を及ぼしていると言わざるを得ません。われわれは心して、本当の愛を取り戻す努力をしていかなければならないのです。

統制と自由

愛のないしつけは、もはやしつけではありません。それは暴力か、制裁かのどちらかです。例えば、子供と一緒にスーパーへ買い物に行き、子どもが何かをほしがったとします。それが買わない方がいいものだった場合、子どもにしつけるべきことは「ほしくて、我慢しなければならぬときがある」ということです。子どもを、きちんとした人間に育てなければいけないという思い（それこそが愛です）があれば、我慢することの大切さをしつけることができます。しかし、そこに愛がなかった場合、お父さんやお母さんのあたまに真っ先に浮かぶのは、どんなことでしょうか。「こんな人混みでだだをこねて恥ずかしい！」「忙しいときなのに、こんなことで手間をとらせて！」「この子はいつもわがままばかり！」となり、「いいかげんにして！」「うるさいわね！」「黙んなさい、みっともない！」「置いてくよ！」と、怒りだけをぶつけることになりはしないでしょうか。子どもは親のけんまくに圧倒され、放り出されるかも知れないという恐怖におびえます。欲しいものはあきらめるかも知れませんが、それは我慢したのではなく、ただこわかったからです。我慢させることこそがしつけであり、深い愛に支えられた統制なのです。

愛を与えることが甘やかしにつながることをおそれる方もいるかも知れませんが、甘やかしは本当の愛ではありません。それは結局親の自己満足、自己愛にすぎないものです。愛は必ず、必要な統制をとまいます。そして、統制によって子どもの他己が育つのです。さらに、愛があれば、子どもの成長にとって必要な自由を、おおらかに認めることができます。子どもに自由を与えるということは、それだけ、親は少し離れたところでじっと見守り、手出し、口出ししたい気持ちをぐっところえなければなりません。自由を与えることと、放りっぱなしにすることは、似て非なるものだからです。手をかけるより、目だけをかけて静かに見守っている方が、ずっと精神的にも、時間的にも、親の奉仕の姿勢が求められます。とくに子どもが幼い、第1次反抗期の頃はそうだと言えます。十分な自由が与えられてこそ、子どもに健全な自己が育ちます。

こうして、他己と自己がバランスよく育つことが、人間の成長にとっては何よりも大切

です。他己を育てるのはおもに統制であり、自己を育てるのはおもに自由です。そして、子どもの成長に欠かせない統制と自由は、深い愛に支えられて初めてあり得るものです。「統制」「自由」そして「愛」、どうかこの3つのキーワードを大事にしていきたいと思えます。

. 現代っ子のころ

1. 子どものころに何が起きているか

自己の肥大

前の章で、子どもの精神は自己と他己の間を揺れながら成長し、大人になってその揺れはうまくバランスをとるようになる、という、ちょっと専門的に言えば私どもなりの「発達理論」を説明しました。この理論の信頼性の高さは、いろいろな研究で実証されています。興味がおありの方は、ぜひ文献をご参照ください。

ところが、現代の子どもたちに対して、この発達理論が通用しなくなっている、そうとしか思えない現象が、いろいろなかたちであらわれてきています。それはどういうことなのか、状況を全体的に見て言えるのは、子どもの成長において、自己と他己の間の揺れがなくなっている、ということです。自己ばかりが成長し、というか、自己ばかりがやたらに肥大し、他己がまったく育っていない子どもが急増しているのです。精神の成長をグラフ化すれば、普通だったら自己と他己の間をカーブを描きながら伸びていく曲線があらわせるのですが、いまの子どもたちの育ち方でそれをすると、他己の方には全然揺れていかないで、自己の成長だけが一直線に描かれてしまう、こんなことが起きていると言えらるのです。

2. 荒れる子ども

学級崩壊

この現象をもっともよくあらわしているのが、もはや社会問題化したと言ってもいい「学級崩壊」です。

従来の児童心理学の常識では、小学校時代の6年間は、子どもの精神はかなり安定して

いて、問題行動はほとんど起きない、とされてきました。フロイトがこの時期を「潜在期」と呼んだのはすでに紹介したとおりで、これは洋の東西を問わない、世界的に通用する事実だったのです。

ところが現代の日本では、この常識が完全にひっくり返っています。普通だったら大人の言うことを素直に聞くようになる小学校1年生くらいから、すでに学級崩壊が始まっているのです。

この本を買ってくださった方々でしたら、学級崩壊の問題にもおそらく関心が高いだろうと思います。もっとも、それほど関心がない方にとっても、このことばは新聞・ラジオ・テレビ・週刊誌、それからインターネットにもあふれていますから、いやでも耳や目に入るかも知れません。学級崩壊が騒がれ出したのは、1997年頃からだと言われています。文部省は最初、この問題に対してかなり慎重な姿勢をとっていました。文部省が腰を上げて、よけい火に油を注ぐようなことになってみてもまずいと考えられたのではないかと思います。しかし、あまりに問題が拡大したので、いよいよ文部省でも黙っていられなくなりました。そして、国立教育研究所というところに実態調査を指示し、この研究所では大学教授や学校の校長先生など、教育の専門家からなる研究会を作って聞き取り調査を始めました。そして、1999年の9月に「学級経営をめぐる問題の現状とその対応」というタイトルで、調査結果の中間報告を発表しました。ほとんどの新聞が非常に大きく扱ったので、ご記憶の方も多いと思います。

原因は先生か

この報告で真っ先に取り上げられたのは、「学級崩壊の原因は、教師の指導力不足によるものが全体の7割を占める」ということでした。つまりほとんどの学級崩壊は、先生がダメだから起こると言うのです。7割がそうということは、3割は違うということですが、それにしても「7割」という数字が世間に与えるインパクトはたいへんなものです。案の定、何人かの現場の先生方は、雑誌の特集などでこの報告結果への反論をおこないました。しかし、文部省からの報告がしっ放しで終わっているように、先生方からの反論も言いっ放しという感じで、両者が絡み合って少しでもいい方向へ前進、ということにはなっていないようです。

その間にも学級崩壊の問題は日増しに深刻化し、それに関する意見も多彩なものが出てくるようになりました。中には、「学級崩壊は行き詰まった学校体制に対する、子どもたちからの『NO!』の声なんだから、崩壊が起きる方がむしろ自然なのだ。こんな学校をつぶすために、もっと崩壊した方がいい」などというものまであらわれる始末で、その善し悪しはまあおいておきますが、問題は解決へ向かうどころか、議論の方向すら定まらないといった状態です。

学級崩壊の問題は、このように現代の教育システムや、もう少し広く社会状況の問題と

して論じられることがほとんどで、それはそれで無意味とも言えないのですが、それら以上に重要なのは、これを子どもたちの心を問題として正しくとらえ、理解することです。学級崩壊のあらわれは、さまざまです。授業が始まって席に着かない、勝手に教室から出ていく、教室の後ろでドッチボールを始める、お菓子を食べたりジュースを飲んだりする、空き教室に立てこもる、教室の中を紙ヒコーキが飛び交う・・・、实例をあげていけばきりがありません。これらはまとめて言えば、指導者である先生の言うことに従わない、ルールや規範を無視し、破る、ということです。そして、人間の精神に着目すれば、約束や決まり事に従わないというのは、他己がない、ということなのです。

他己は、他者を求め、他者と力を合わせて、他者と共に生きていきたいという心ですから、これがなくなれば、ほとんど必然的に、ルールや規範は無視され、破られるようになってしまいます。

2. 自己肥大の宿命

赤ちゃんの自己と他己

ここでもう一度、人間の精神の成長を、生まれたばかりの頃にさかのぼって見直してみたいと思います。

生まれたばかりの赤ちゃんの心にも、もちろん自己と他己があります。そして実は、赤ちゃんの心というのは、この自己と他己が、完全に一体になっているのです。むずかしく言えば、統合されている、ということです。自己と他己が統合されていると、人間はどうなるのか、赤ちゃんの姿を思い浮かべて考えてみます。

まず、どんな人が相手でも、無条件に好意を示します。どんなにかつい顔つきの人でも、暗い表情をした人でも、またはどんなにハンサムでも絶世の美人でも、見かけによって対応を変えることはありません。また、お金持ちの人でも、懐が寂しい人でも、総理大臣でも、芸能人でも、おまわりさんでも泥棒でも同じことです。誰が相手でも、目が合えばにこにこ微笑みます。決して人を差別しないのです。

それから、絶対に人をうらみません。ミルクを与えられず、おむつも替えられず、放っておかれれば、それはもちろん火のついたように泣きますが、それっきりです。さらにそのまま放置されれば、哀れにも泣きながら衰弱し、死んでいくだけです。人のものは盗みませんし、呪いのことばを吐くこともありません。歩けないから、しゃべれないからそうしないだけでなく、人をうらみ、憎む心がないのです。そして、絶対に悪いことをしません。われわれ大人はいつでも、何かしらの悪をなしてしまう危険性ととも生きていて、自分では気づかないだけで常に小さな悪を犯しながらでなければ生きていけません。生まれたばかりの赤ちゃんは、絶対に、100%の保証付きで、悪いことをしません。それが、

精神において、自己と他己が統合されている、ということなのです。

自己と他己のバランス

そして、1歳頃までの間に、どんどん自己が成長していくことは、先ほど述べたとおりです。自己を成長させながら、赤ちゃんは、いろいろなことができるようになっていきます。それは、いいこともできるようになります。同時に、悪いこともできるようになるということです。だんだん、人をうらみ、憎み、ねたむこともできるようになってしまうのです。これは、一体になっていた自己と他己が次第に分裂し、自己だけが大きくなって、他己は小さいままということでもあります。

続く幼児期で他己が大きく育てば、こうした自己の成長とのバランスをとることができます。他己が育てば、というのは、お父さん・お母さんによって適切なしつけがなされれば、ということです。かんじんなこの時期に放っておかれれば、他己は勝手には育ちません。自己は放っておいても勝手に育ちますが、他己はそうはいかず、親が育ててあげなければならないのです。小学生になっても他己が育っていない子どもたちは、この時期のしつけにかなり問題があったことが予想されます。しかし、幼児期のしつけ不足は、小学校以降でも十分に取り返せることは、先に申し上げておきました。

2~3歳の頃のしつけで気をつけなければならないのは、先に「三つ子のたましい百まで」ということわざをあげて述べておきましたが、親が必要以上に子どもを服従させようとして、こわがらせ、おどして、無理やりにでも言うことを聞かせようとするのです。自己と他己の揺れを考えていただければわかるように、無理やりに抑えつけなくても、1歳を過ぎれば、子どもの心は自然に親の方に向けてきて、マネをしたがったり、言うことを聞きたがったりするようになるものなのです。そうした、子どもの自然な成長の流れにしたがって、親は必要なことをしつけていけばいいと考えられます。

「鉄は熱いうちに打て」とかなんとか言って、その後続く第1次反抗期にも、子どもを力づくで服従させようとするれば、これは完全に逆効果になってしまいます。まだまだ親の方が力が強く、口もはるかに達者ですから、子どもはどうしたって親にかないっこありません。無理に抑えつけられれば、絶対に服従させられます。しかし、服従させられたことが、イコールしつけの成功とは、決して言えません。しつけに従うのはふつう他己の働きですが、この場合の服従は他己によってではないのです。親にぶっとばされるという恐怖心からかも知れません。それならすきをついてまた反抗してくるでしょう。あるいは、とりあえず言うことを聞いていた方が、叱責から逃れることができ都合がいいという打算が、早くも働いているのかも知れません。これらは、自己を何とか守ろう、そして自己を肥大させてやろうという精神の働きです。他己の育つ余地は、まったくありません。第一次反抗期には、十分な愛情と自由こそが一番に必要で、それが満たされれば、あたかもブーメランのように、子どもの心は再び必ず大人の方に向けてくるのです。

子どもの他己は、大人が育てなければ育ちません。「他己を育てて欲しい」と、子どもが無意識のうちに心に向けてくることはありますが、そのときに大人が対処してあげなければ、他己は育たないのです。反対に、自己は放っておいても、というか放っておけばおくほど、どんどん大きくなります。これは、すべての人間が例外なく負った、宿命とも言えます。

歴史に見る自己と他己

現代社会を表現して、よく「欲望社会」とか、「消費社会」とか言われます。ここでは、社会に暮らす人々みんなが、限りなく自己を肥大させているのです。ちょっと歴史に目を向けてみますと、太古の昔には、人間はただ自然によって「生かされている」だけの存在でした。太陽が輝くのも、雨が降るのも、風が吹くのも、寒くなるのも暖くなるのも、食べ物に恵まれるのも、すべて、人間をはるかに超えた大いなる力があって、それが働いているのだと考えられていました。人間は絶対にそれに逆らって生きることはできず、ひたすらその力に従って、その恵みを受けて生きることができるだけだと、すべての人が疑いもなく思っていました。

もう少し時代が下ると、「文明」というものが生まれました。中学校の社会科の授業で、「世界四大文明」を勉強したことを覚えていらっしゃる方も多いと思います。この時代になっても、人々の考え方はほとんど変わりませんでした。さらに人々は「神」をはっきりと自覚するようになります。自然をも超えた、大いなる創造主がいて、この世のあらゆるもの（生物も物質も）は、その創造主の意志と力によって生み出され、生かされているのだと考えるようになりました。世界の人々はまだ、人間は自分の力で生きているのではなく、ただ生かされているだけだと考えていました。それはつまり、精神の自己と他己のバランスに注目すれば、自己に比べて他己が圧倒的に大きかったということです。人間はだれでも、生まれながらにして自己だけが大きくなってしまいう宿命を負っていると先ほど申し上げましたが、この時代は「自然」「神」といった絶対的な他己が、自己を抑えていたのです。

ただ、古代文明が成熟し、社会システムが整備されてくると、人間は、人間だけの原理で世界を理解しようと試みる態度をもち始めました。そのひとつのあらわれが、古代ギリシャで起こった民主主義制度です。そこでは「ソフィスト」と呼ばれた職業教師が数多く活躍し、この世の現象はすべて人間の理性と論理で理解することが可能だと説いて回りました。その論理が、ときには「詭弁」といわれる屁理屈におちいったのは、よく知られていることです。また、同時代のインドには「バラモン」という僧侶が、たいへん大勢いました。この人々は、統一的な教えのもとに信仰を説いていたのではなく、それぞれが、言うならば自分勝手に、てんでんばらばらなことを主張して、おのれの流派の拡大にもっとも心を砕いていました。手塚治虫氏の遺した長編「ブッダ」には、この状況がたいへんわ

かりやすく、かつ氏一流のおもしろさで描かれています。さらにこのころの中国は「春秋戦国時代」であり、弱肉強食、下克上、同族合い食（は）む乱れた世の中でした。その中に「諸子百家」と呼ばれた実に多くの思想家があらわれ、さまざまな哲学や処世術を説きました。

紀元前 700 年から 400 年頃にかけて、世界はこのようになりかなり共通した状況下にあったのです。それは言うならば、それまでの「他己重視」の社会から、人々の自己追求、自己肥大への転換が始まった時代です。そして、その中から、ソクラテス、お釈迦様、老子、もう少し時代が下ってイエス・キリストが生まれ、今日なおきわめて大きな影響力をもつ教えを説き始めました。ここに共通しているのは、どれも自己の肥大を戒め、他己の豊かな回復を教える思想です。このような教えは、自己肥大に傾いていた当時の人々に、すぐには受け入れられませんでした。心ある人々によって徐々に広められ、いつしか社会に深く浸透していきました。こうして世界は、自己社会から再び他己社会へと進行方向を変えていきます。

心理学に続いて今度は歴史学の講釈が始まった、どうなってるんだこの本は、と思われる方がいるかも知れませんが、もう少しお付き合いください。抑えられてきた自己が、歴史的な流れの中で、解放される時代がやってきます。ヨーロッパにおいても、日本においても、西暦が 1,000 年代に入ると、他己に代わって自己が大きくなってきます。ヨーロッパでその傾向が非常に明らかになったできごとは、宗教革命です。マルティン・ルター(1483 - 1546) や、ジャン・カルヴァン(1509 - 1564) といった名前について、「どっかで聞いたことあるなあ」と思われる方は多いと思います。こうした人々は、ほとんど神に等しいほど絶対的な力を持っていた教会権力に対し、世俗に生きる人々の権利と自由を主張したのです。この流れはルネッサンス時代へと続き、さらに近代民主主義・資本主義の成立へと至ります。

日本ではどうだったでしょう。こちらはだいたい平安時代の終わり頃まで、完全な「他己社会」だったと言えます。そのころの日本の最高権力者は天皇でしたが、当時の天皇が国を治めるにあたっては、神仏におうかがいをたて、よろずその示すところに従っていたのでした。ところが、平安時代に終わりに武士が登場します。「イクニつくろう鎌倉幕府」で、1192 年、源頼朝が鎌倉に武士政権をうち立てます。武士の世の中は、この後江戸時代が終わるまでおよそ 700 年間にわたって続きます。神仏に代わり、人間が絶対的権力を握って、人民を支配する時代になったのです。徳川家康などは「東照大権現」ということで、自分が神様になってしまいました。

世界はこのような歴史の流れをもち、人々はその中で自己をどんどん大きくさせてきました。自己と他己は、「あちらをたてればこちらがたたず」という関係にあります。むずかしく言えば、矛盾的なふたつの心です。自己ばかり大きくなれば、必然的に他己は小さくなっていきます。

自己肥大のきわみ

そして、現代は、自己の肥大が、ほとんど極限までできています。自然や環境は、人間にとって、それによって生かされているものではなく、人間が「保護」してやる対象になりました。自然保護、環境保護は、現代のキーワードでもあります。

いま、科学の最先端にあるのは、遺伝子の研究分野です。「ヒトゲノム計画」ということばが、よく新聞に載っています。生命の設計図といわれる遺伝子は、細胞の中の染色体というひもみたいな物質に書き込まれているのですが、およそ 30 億と言われる膨大な数の遺伝子を、ひとつ残らず読みとろうというのがこの計画です。この計画は国際的な協力のもとに進められていて、もうかなりのことが明らかになっているようです。この計画が完了すれば、例えば、はしから数えて何番目の遺伝子が鼻を高くする情報をもっているのかがわかるわけです。そうすると、そこの遺伝子をちょこっといじれば、人工的に鼻を高くも低くもできるようになります。美容整形とは根本的に違う、生まれつきの低い鼻、高い鼻が思い通りに作れるのです。「クレオパトラの鼻がもう少し低かったら、世界の歴史は変わっていただろう」などと言いますが、つまりこのことばは、歴史の流れというのは人の力の及ばない、偶然のできごとによって左右されるということを行っているわけです。もし本当に鼻の高い低いで歴史が変わるのなら、人間は遺伝子操作によって歴史まで変えられるということになります。人間はこのように、自己を肥大させることによって、急激に科学・工業文明を発展させてきました。そしてその文明の影響を受けて、自己の肥大はさらに進むという循環が生じています。

学級崩壊の話からずいぶん遠いところまでやってきました。学級崩壊は、子どもたちの自己ばかりが大きくなり、他己がまったく育っていないところに根本原因があると申し上げましたが、どうして子どもたちに他己がないかといえは、子育てをする大人たちに他己が欠けているからだと言わざるを得ません。社会システムや学校制度をいじったくらいでは、この問題の解決は、まず不可能です。現代に生きる私たちみんなが他己を回復すること、これがほとんど唯一の解決策だと考えられます。そして、これは学級崩壊に限ったことではありません。いま、地球に生きる人類すべてが抱えているさまざまな問題、それはどれも、生きるか死ぬかに直結することばかりと言えますが、そうした問題を克服する根本は、他己を回復することに集約されるのです。

他己回復の成否は、子育てと教育にかかっています。いまの政府が、教育改革を最大の目玉にしていることはよく知られています。では、この国のリーダーたちは、教育改革の先に何を見ているのでしょうか。たぶんそれは、国際競争に勝ち抜き、情報革命の嵐の中を生き抜いていける人材を育成すること、これがすべてです。しかし、それではダメです。状況はますます悪化します。サバイバルできる人間を育てることは、他己を捨て、自己のみで生きる人間を育てることだからです。それは、必ず社会の崩壊と、将来的には地球の滅亡を招きます。自分を抑えて他者をたてる、という他己の働きを回復することは現代社

会の緊急課題と言えます。それがなされなければ、とくに日本は世界の中でも真っ先につぶれるでしょう。子育てと教育の重要性は、このような大きな視点に立って考えるべきです。

3. いじめを考える

人間の不安

学級崩壊よりはるか以前に問題化し、困難性と陰湿さでは、学校が抱える問題のトップにあるとも言えるのが、このいじめです。いじめ問題は、いっこうに解決のきざしが見えません。文部省も毎年毎年実態調査をし、結果を報告していて、そこで言われるのは「発生件数は年々減少しているが、実際には見えにくくなっているだけではないか」ということです。おそらくその通りだろうと思います。

いじめとはいったい何なのでしょう。これこそ子どもの心の問題として、私どもの自己と他己の考え方を適用してみたいと思います。

現代人が、大人も子どももそろって限りなく自己を肥大させていることは、すでに申し上げたとおりです。自己肥大が進むと、人間は自己の殻に閉じこもり、自己を絶対なものと考えるようになってしまいます。「この世は自分中心に回っている」と思うようになるのです。しかし、そうして自己を絶対化すると、人間の心には同時に強烈な孤独感、不安感が襲ってきます。人間は、その本質として、自己と他己をもっています。精神を病んでいる人は別として、他己がない人間はいないのです。人間ならば誰でも他己をもっているということは、人間は、他者に心を開き、他者と心を通じ合わせてはじめて、生きる幸せや喜びを感じられる、ということです。人間は、肉体的・経済的にだけでなく、精神的にも、お互いに支え合わなければ生きていけない存在なのです。むずかしいことばでは、このことを「他者に定位する」と言います。

さて、自己に閉じこもり、自己を絶対化すると、この他者定位ができません。他者定位ができなくなると、それまでは自分を支えてくれた周りの人々が、一転して自分の敵になってしまいます。すきあらば自分に襲いかかり、自分を食い殺そうとねらっている狼に見えてしまうのです。そして、強烈な孤独感と不安感にさいなまれます。

この不安から逃れる道はただひとつ、他者に心を開き、心を通わせ合うことしかありません。しかし、自己に閉じているとそれができないので、他の方法で不安を解消する方法に迫られます。いつまでもそのままでは、不安に押しつぶされて、ついには死ぬしか方法がなくなってしまうからです。

不安解消 = 欲望の充足

では、自己に閉じ、自己を絶対化した人がとる、不安解消の方法とは何なのでしょう。それを他己に求めることはできませんので、当然自己に求めることになります。それは、自己の情動、しかもその中の自己の欲望に執着することなのです。情動には、快苦喜怒哀楽、気分、欲望などがあると前に申し上げました。自己に閉じた人は、このうちの欲望に執着して不安から逃れようともがくのです。

欲望には、まず食欲（物欲・金銭欲）がありました。現在、日本人ほど食べ物に執着している国民が他にいるのでしょうか。毎日毎日おいしいものをたらふく食べ、世界中からもぜいたくなもの、珍しいものを輸入しています。グルメ番組、グルメ本、グルメ雑誌はあふれんばかりです。国内だけでは飽きたらず、世界中の国に出かけていって、豪華な料理にかぶりついています。また、物に対する欲望、お金に対する欲望は、いちいち例を挙げるまでもないでしょう。

次は性欲です。これはちょっと実例を挙げるのがはばかれるものばかりなのでひかえておきますが、外国から日本に来た人は、日本ではあまりにも簡単にヌード写真集やポルノ雑誌、アダルトビデオが手に入るので、だれしもビックリします。アメリカも日本に負けないポルノ大国ですが、網の目のような規制と厳罰主義で、子どもの目には簡単にふれないようになっていきます。自動販売機やコンビニエンスショップで手軽に買える日本とは大違いです。それから東南アジアへの買春旅行や援助交際、テレホンクラブなど、世界広しといえどもこんなことをしているのは日本だけです。いやはや、実例をひかえるはずが、これでは全然ひかえていません。また、長生きに対する執着にも、すさまじいものがあります。質素儉約で長生きを目指すのはすばらしいことですが、さんざん不摂生をしておいて、急激なジョギングと薬漬けで健康を取り戻そうとは、本末転倒としか言いようがありません。また、現代医学の最大の目的は「延命」にあります。少しでも命を永らえさせるよう努力すること、そのこと自体が悪いこととは決して言えませんが、患者さんの人間性やご家族の気持ちを無視してまでも生き延びさせ、それがお医者さんの手柄と病院のもうけになるようなことがまかり通るなら、これまた本末転倒もいいところです。

当然優越欲もすごいことになります。サラリーマンの激しい出世競争は世界的にも有名ですが、これだけではさほど異常とも言えません。それよりもっと「ヘン」なのは、例えばスポーツに対する過剰な熱心さです。優越欲には、他者に対する攻撃性が含まれます。他者を圧倒したい、やっつけたいという思いが人間にはあるのです。しかし、実際に他人を攻撃すると、手を出せば傷害罪、口だけの攻撃でも名誉毀損罪などで逮捕されたり訴えられたりしてしまいます。だから日常生活では「コンチクショウ」と思ってもじっと我慢しています。そのうさ晴らしが、スポーツに向けられるのです。スポーツでは、決められたルールの中で、徹底的に相手を攻撃し、叩きのめすことができます。多くの観客は、最高に強いスポーツヒーローに自分の姿を重ね合わせ、自分の代わりに相手をコテンパンに

やっつけてもらい、その姿に熱狂し酔いしれます。適度にスポーツを楽しむのは、私どもも反対ではありませんが、度を越した執着は露骨な優越欲のあらわれと言えるのです。オリンピックをめぐるのは、さまざまな裏取引や薬物汚染が問題となっています。「参加することに意義がある」などということばは、もはや完全にきれいごとになってしまいました。とにかく国をあげて、勝つことただそれだけをひたすらに追求するのです。その中で世界的なヒーローが生まれ、それに観客が熱狂すれば、オリンピックに関連した企業は莫大な収益をあげることができます。4年に一度開かれる、世界を巻き込んだ壮大な欲望合戦と言えなくもありません。

とりあえず大人はこのように、攻撃性の解消をスポーツなどに求めて何とか社会に適応することができますが、子どもは大人ほどうまく立ち回ることができません。そのうさ晴らしのひとつが、いじめというかたちをとってあらわれるのです。もっとも、いじめはもはや子どもだけの問題ではなく、大人社会のいじめも、現在ではだいぶ深刻になっているようです。

いじめのメカニズム

自己ばかりを肥大させた子どもが、そのために引き起こされる不安から逃れようとして欲望に執着し、そのひとつがいじめとなってあらわれる、これがいじめの基本的な心理的メカニズムです。そして、自己と他己は矛盾的な心ですから、自己が大きくなれば、反対に他己は小さくなっていきます。枯れていく、と言った方がイメージとして理解しやすいかとも思います。他己が枯れていくということは、「人の心を感じるころ」がなくなっていくことです。人が何を思っているのか、喜んでいるのか悲しんでいるのか、楽しんでいるのかいやがっているのかが読めなくなっていくのです。これがもっと進むと、人を人とも思わなくなってしまうのです。他人が、心をもたない「物」にしか見えなくなってしまうのです。友だちを「物」と見なして、陰湿で残虐ないじめを繰り返す、昨今の状況を見るとこうなっているとしか考えられません。

このような子どもの心が極限にまで達したのが、かつて神戸で起こった「酒鬼薔薇聖斗事件」です。犯人の少年は、被害者の男の子をもはや人間とは考えていなかったと言えます。これは雑誌に掲載された少年の供述調書を読めば明らかです。

どれほど「いじめをなくそう」と合い言葉のように唱えても、子どもに他己、しかも一番基本となる「人の心を感じるころ＝感情」を取り戻さない限り、状況は絶対によくないと言えます。いじめ問題に対する最大にして唯一の切り札は、感情を育てる教育、すなわち「情育」なのです。

4. 不登校

他者定位ができない子ども

さらにもうひとつ、現代の教育が抱える大きな難問が「不登校」の問題です。いじめはいちおう、統計の上では発生件数が減っていますが、不登校の方はこの問題が表面化してからずっと増え続ける傾向にあります。そして現在では、全国のおよそ12万人あまりの子どもたちが、何らかの事情で不登校になっているということです。ある人が、「不登校児が12万人、これは見ようによっては『たった』12万人『しか』いないということだ。その他の圧倒的多数の子どもはいまでも学校が好きということではないか」と述べ、もっと前向きに考えていこうと主張していますが、残念ながら不登校の悩みを解決するものにはなっていないと言えます。

不登校の原因はさまざまです。ですからその対策も、原因に合わせて何通りかのものを考えなければなりません。ここではそれらの中でも、「学校が怖い」「友だちに会うのが怖い」といったものについて考えてみたいと思います。これは、不登校全体の中でも、相当数を占めていると考えられます。朝目ざめて、布団の中でぼんやりと学校のことを考えていると、だんだんと不安になってきて、そのうち本当に熱が出たりおなかが痛くなったりしてくるのです。学校休んで午後になると、そういった症状はすっかり消えてしましますが、翌日の朝になると、また同じような症状が出てしまい、その繰り返しでとうとう学校へ行けなくなってしまう、このような子どもはかなりの数にのぼっているようです。精神医学的に見れば、「神経症」的な不登校と言えます。

これは根本的には、他者に心を開けず、他者を頼れない、つまり他者定位ができないところに原因があると言えます。他者定位ができないと、友だち、先生、学校のすべてが、自分を否定してくるように思えてしまいます。周りのみんなが敵に思えてしまうのです。そうして自己に閉じこもるのですが、そうすると先ほども言いましたように強烈な不安が襲ってきます。その不安が身体的な症状までも引き起こしてしまうのです。こうした問題で悩み、苦しんでいらっしゃるご家族は、だいぶ多いようです。この問題を根本的に解決するには、子どもが他者定位できるように、他己を育てることしかありません。そして、その治療プログラムは、確立しているとは言えないのです。今後、教育や心理、医療に携わる人々が取り組むべき、きわめて重要な課題です。もちろん私も、その一端を担っていきたいと考えています。

5. 高校生の規範意識

規範低下

文部省は、おもに「酒鬼薔薇聖斗事件」をきっかけとして、中央教育審議会という会議の中に「幼児期からの心の教育の在り方に関する小委員会」という特殊なグループを設置しました。そして、協議の結果を「新しい時代を拓く心を育てるために - 次世代を育てる心を失う危機 - 」というやや長いタイトルの報告書にまとめて発表しました。1998年6月のことです。これは、『文部時報』という、文部省が発行している雑誌の特集号として、どなたでも読むことができます。また、インターネットの文部省のホームページでも閲覧することができます。しかし、だれもが興味をもって読めるものというわけではないので、ここでは、そこから抜き出したものをほんの少しご紹介します。

この報告書の中に、「日・米・中の高校生の規範意識」というグラフが、資料として載せられています。この調査はもともと「日本青少年研究所」という機関が、1996年に「ポケベル等通信媒体調査」としておこなったものだそうです。ここには、社会的な常識やルール、つまり「規範」に反するような行動について、「それをするかどうかは本人の自由でいい」と回答した日本・アメリカ・中国の高校生の割合が、グラフになって示されています。その結果たるや、まさに異常です。日本の高校生諸君には悪いですが、彼らの一般的な行動を見ていれば「ふーむ、なるほど」と納得できる部分もあります。しかしいずれにせよ、恐ろしいまでの異常な結果を示していることには変わりありません。日本が、他の2国を圧倒的に引き離している項目と数値をあげてみると、次のようになります。

「先生に反抗すること」	日 79.0%	米 15.8%	中 18.8%
「親に反抗すること」	日 84.7%	米 16.1%	中 14.7%
「学校をずる休みすること」	日 65.2%	米 21.5%	中 9.5%
「売春など性を売り物にすること」	日 25.3%	米 調査せず	中 2.5%

このほかの項目の中には、アメリカの方が日本より高い数値を示しているものもありますが、その場合には3国のどれもが、きわめて低いレベルにとどまっています。この4項目においては、日本だけが突出しているのです。

とくに「売春」に関する質問の結果は強烈です。あくまで数字の上でのことではありますが、それにしても4人に1人が「本人の自由でもいい」と答えているのです。アメリカでは、高校生に対してそんな質問をすることは、初めから問題外です。そんなこと、あるはずがないということです。

「援助交際」とは、わけのわからないことばを作り出したものだと思いますが、世界のどこに、「遊ぶお金が欲しい」「洋服やアクセサリーを買うお金が欲しい」などという理由で、自分から望んで売春行為をする少女がいるのでしょうか。そんな子たちがいるのは日本だけです。日本の子どもたちの規範意識は、世界でも最低だということです。

もう述べたことですが、「ルールや約束を守ろう」「人が喜ぶことをしよう」「常識はずれなことはやめよう」という精神の働きは、他己なのです。つまり、規範意識は他己です。規範意識が薄いということは、イコール他己を失っているということです。そして、世界の他の国々と比べてみても、日本の子どもたちが一番、他己を失っているのです。

このままでは、日本はほぼ確実につぶれます。そして、日本がつぶれれば、世界がつぶれます。この国際化時代には、当然そうになってしまうのです。何としてでも、この状態から抜け出さなくてはなりません。そのために真っ先に求められるのは、われわれ大人自身が他己を回復することです。

・求められる「ころ」とは

いままでの説明で、現代っ子、そして現代に生きる人々のほとんどが、ほぼ極限まで自己を肥大化させ、同時に他己を失っていることはご理解いただけたと思います。ここでは、現代っ子たちの精神がどうなっているのかを、もう少し掘り下げて、データの・分析的に述べてみたいと思います。「そんな小難しいハナシはまっぴらごめん」と言う方もいらっしゃるかも知れませんが、どうぞ読んでみてください。中味は案外身近な、うなずいていただけるものだと思いますから。

1. 根気のなさ

学習障害

私どもはいま共同で、主として「学習障害」の研究に携わっています。この学習障害は、英語の Learning Disabilities の訳語で、頭文字をとって LD とも言われます。新聞や雑誌で、このことばを見たことがある方も多いのではないのでしょうか。この研究の内容と、いままでわかったことだけでも、本の2冊から3冊分くらいにはなりそうなのですが、くわしいことは別の機会にゆずることにして、ここでは、研究を通じて明らかになってきた、いまの子どもたち全般が抱える問題に限って述べていきたいと思います。

学習障害は、社会的にもかなり話題になっています。この障害があると考えられる子どもたちは、実に多彩な症状を示し、そのために学習障害とは何なのかが、本当のところはいまだによくわかっていません。脳に、ほんのわずかな機能障害があるのが根本原因と考えられていますが、脳を調べてみても、特別に病的な部分や、働きの悪さなどは、あまり見つからないのです。

私どもは、医学的な面からではなく、行動面・心理面からこの障害に迫ろうと計画しました。そして、学習障害について書いたさまざまな本や研究論文を探してきては、そこにある、学習障害児によく見られるとされる行動を拾い集めるところから作業を始めました。ピックアップした行動特徴を整理したところ、159 個の項目になり、それぞれについて、その行動が「しばしば見られる」のか、「ときどき見られる」のか、「見られない」のかをたずねるアンケート用紙を作りました。その用紙を大量に印刷し、約 9,000 人の保護者の方々に配って、ご自分のお子さんの様子を答えてもらいました。実際に返していただいたのは、およそ 4,000 部です。

用紙が返ってくると、今度はそれをデータ化してコンピューターに入力し、統計的な計算をおこないます。返していただいた用紙のうち、とりあえず 916 部を分析対象にすることにしました。目的は、「どういう行動が学習障害児の特徴と言えるのか」をつきとめることです。因子分析という統計的な手法を用いると、それがわかってくるのです。

尺度構成

因子分析をおこなうと、「尺度」というものが得られます。これは英語の「スケール」の訳で、つまり目盛り、またはものさしということです。尺度は、「その行動が見られるか見られないかによって、精神の働きを見ようとするものさし」と言えます。

今回の計算によって、10 個の尺度が得られました。それぞれの尺度はさらに 10 個の項目を含んでいて、この尺度は全体で 100 個の質問項目からなっているということになります。尺度には、10 個の項目の特徴を一言であらわせるような名前が付けられています。以下に、尺度の一覧を載せますので、みなさんもお覧になってみてください。

【第 1 尺度 「対人関係」】

- 1 知ったかぶりをする
- 2 人のものを取ったり、人の邪魔をしたりする
- 3 自分のしたいことは周りにかまわずやり通そうとする
- 4 順番を待てない
- 5 いきなり人を叩く
- 6 作り話をする

- 7 譲り合いができない
- 8 自分に都合の悪いことは、人のせいにする
- 9 すぐにかんしゃくをおこす
- 10 約束や決まり事をよく忘れる

【第2尺度 「会話・応答」】

- 1 相手にかまわず話し続ける
- 2 むやみに大声を上げたり、大笑いしたりする
- 3 むやみにはしゃぐ
- 4 聞き返が多い
- 5 一つの話題にこだわったり、同じ質問を繰り返したりする
- 6 質問が終わらないうちに答えてしまう
- 7 直接話しかけても聞いていないように見える
- 8 話題が急に変わったり、あちこちにとんだりする
- 9 だれかれかまわず話しかける
- 10 見知らぬ人にも平気で話しかけたり、なれなれしい態度をとったりする

【第3尺度 「行動抑制」】

- 1 無意味に動き回る
- 2 座っていなければいけないときでも席を離れる
- 3 建物や部屋、歩道から急に飛び出す
- 4 新しい場所に行くと、すぐ人や物に触りたがる
- 5 周りをよく見ずに物を振り回す
- 6 むやみに走り回る
- 7 いつも身体のどこかを触ったり、動かしたりしている
- 8 いつも手足を動かしている
- 9 静かに遊べない
- 10 じっと座ってられず、もじもじしている

【第4尺度 「自我強度」】

- 1 人にどう思われているかを強く気にする
- 2 コマーシャルのせりふや広告のマークなどをよく覚えている
- 3 いやなこと(けんかや仲間はずれなど)をいつまでも覚えている
- 4 同じ遊びを長くする
- 5 自分のしたいことがなかなか決められない

- 6 バスの経路や行き先をよく覚えている
- 7 周りのちょっとしたことに気を取られる
- 8 鉄道の駅名・地名をよく覚えている
- 9 ちょっとしたことですねたり、悲しんだりする
- 10 緊張しやすい

【第5尺度 「論理思考」】

- 1 時計が読めない
- 2 靴の左右を間違える
- 3 数をとばして数える
- 4 同じ絵ばかり描く
- 5 会話の中で、理由や原因、結果などをうまく話せない
- 6 左右がわからない
- 7 語彙（ボキャブラリー）がきわめて少ない
- 8 昨日・明日・一昨日・明後日などを間違える
- 9 10以下の数の足し算・引き算ができない
- 10 数の大小や多少がわからない

【第6尺度 「言語表現」】

- 1 ごく簡単な文でしか話すことができない
- 2 一字一字たどって読む
- 3 文を書くと、助詞を抜かしたり間違えたりする
- 4 長い文が読めない
- 5 お」と「を」、「わ」と「は」、「え」と「へ」を混同して書く。
- 6 話したことを文にできない
- 7 拗音（小さい「や」「ゆ」「よ」）や促音（小さい「つ」）が正しく書けない
- 8 すずめ」「しじゅめ」、「ぞう」「じょう」など、正しく発音できない語がある
- 9 文法の誤りが多い文を書く
- 10 幼稚な言葉遣いをする

【第7尺度 「運動統合」】

- 1 つま先立ちや片足立ちがうまくできない
- 2 先の不器用さが目立ち、例えばボタン、ひも、はさみなどがうまく扱えない
- 3 歩いたり走ったりするとき、手足の動きが不自然に見える

- 4 スキップができない
- 5 転びやすい
- 6 動作が鈍い
- 7 身振り手振りのまねができない
- 8 両足同時ジャンプができない
- 9 全身を総合的に動かす運動（ボール運動、なわとび、鉄棒、マット運動など）が苦手である
- 10 走っているとき、物にぶつかりやすい

【第8尺度 「神経統合」】

- 1 ちょっとしたことでもびっくりしたりうろたえたりする
- 2 うつろな目つきをする
- 3 発作的な症状が出る
- 4 新しいことにすぐ取り組めず、いつまでも前のことにこだわる
- 5 人と話すとき視線が合わない
- 6 利き手が定まっていない
- 7 変に甲高い声で話す
- 8 無気力に見える
- 9 いつまでも同じ物（例えば輪ゴム、鉛筆など）をもてあそぶ
- 10 脳波に異常がある

【第9尺度 「根気・持続」】

- 1 学習・遊びの準備や後片付けができない
- 2 指示を聞いても、それを実行できない
- 3 学習を続けることをいやがる
- 4 学習や遊びが長続きしない
- 5 いやいや学習する
- 6 文字が乱雑で判読しにくい
- 7 学習や遊びに根気強さがない
- 8 努力することをきらう
- 9 失敗したり、間違えたりしても、やり直そうとしない
- 10 よく寝ころぶ

【第10尺度 「注意・集中」】

- 1 習った漢字を使わない

- 2 学習に必要なものをなくす
- 3 学習や遊びに注意深さが感じられない
- 4 文字を抜かして読む
- 5 学習や遊びに単純な間違い・失敗が多い
- 6 物事が順序よくできない
- 7 時間を守れない
- 8 誤字・脱字が多い
- 9 習った漢字が読めない
- 10 言葉を勝手に変えて読む

10個の尺度につけられた名前は、だいたいその意味するところがご理解いただけると思いますが、ややわかりにくいものもありますので、少しだけ説明を付け加えます。

対人関係、 会話・応答、 行動抑制、これらはけっこうわかりやすいと思います。ちょっとむずかしいのは、 自我強度です。ここに含まれている10個の質問項目からわかるのは、自己が閉じこもろうとする殻があるとすると、その殻の固さだとお考えになってください。コマーシャルや広告、バスや鉄道のことをよく覚えていて、それを繰り返しているというのは、不安や心配ごとに直面したときに、それに立ち向かえず、自分の中にもっている変わらない記憶に頼って、安心を得ようとする精神の働きをあらわす目安になると考えられるのです。それならば自我の「強度」ではなくて「弱さ」ではないかと思われるかも知れませんが、閉じこもる殻の固さなのだとすれば、納得していただけるでしょう。弱いからこそ、よりがんじょうな殻に閉じこもる必要に迫られるとも言えます。ヤドカリが、やわらかいおなかを貝殻にしまっているところをイメージしてみてください。それから、こうした行動が見られた場合、全部が全部悪いものなのだとお考えになることはありません。要は程度の問題です。自己と他己というふたつの心をもった人間は、必ず精神的な支えがないと、安心して生きていくことができません。そして、人間に他己があるということは、頼る相手が、ふつうは他者であることが健全なのです。他者に心を開き、依存できたとき、人間は本当の安心と幸せを感じることができます。他者に十分頼れないときに、その対象は自己に求められることとなります。しかしそのとき、「自分になんか頼るな！」とばかりに、その支えを無理やり取り上げたりすれば、完全に支えを失ってパニックにおちいる危険性もあります。

論理思考と、 言語表現は、さほど説明がいらなないかと思えます。 運動統合も、まあまあわかりやすいと思えますが、 神経統合は、あまり聞かないことばでとまどいを感じられるかも知れませんが、人間の脳は、神経細胞というもののかたまりでできているとも言えます。無数の神経どうしがつながり合い、絡み合って、複雑なネットワークを作り上げています。そのネットワークは、生まれたばかりの頃にはできあがっていません。成長

していく中で、いろいろな刺激を受け入れ、経験を重ねていくことで神経が伸びていき、ネットワーク接続がうながされます。利き手が定まっているか、相手の目を見るかなどというのは、このネットワークのできあがり具合を見る目安になると考えられます。それを「神経統合」ということばで表現したのです。

根気・持続と、注意・集中も、けっこうわかりやすいのではないかと思います。

さて、このようにしてできあがった尺度をどのように用いるかですが、質問項目の横に、2・1・0で区切った目盛りをつけます。そして、それぞれの項目の言動が、お子さんの様子から「しばしばみられる、もしくはかつてしばしばみられた」場合には2、「ときどきみられる、もしくはかつてときどきみられた」場合には1、「いまも昔もみられない」場合には0を丸で囲んでもらいます。そして、2に丸なら2点、1なら1点、0なら0点として採点します。そして、10個の尺度ごとに点数を出します。各尺度の満点は20点です。点数が高いほど、日常生活において困ることが多いだろうと考えられます。そして、どの尺度の点数が高いのが、学習障害児の特徴と言えるのかを調べていくのです。

研究は今のところ、尺度が完成したところまで進んでいます。今後は、できるだけ多くの学習障害児をお持ちの保護者の方々にご協力いただいて、この尺度によって学習障害の行動特徴は何かを調べるのが課題です。「学習障害とは何か」が明らかになる可能性は、かなり高いだろうと思っています。

根気・持続と自我強度

先ほど、916人ほどの保護者の方から返していただいたデータをもとに、尺度を作ったと申しあげました。この方々のうち、「うちの子は学習障害と言われました」と書いて返してくださった親御さんは、6人でした。916人中6人ですから、割合にすれば0.007%ほどです。他の圧倒的多数のお子さんは、日常生活でいろいろ困った行動をとることが比較的多いものの、とにかく障害はないとされていました。ですから今回作った尺度は、「何らかの原因で学習や行動に問題がある子どもたちを、幅広く調べるためのもの」と言えそうです。それが学習障害の研究に有効なようだ、という形になっているわけです。

さて、916人全員の子どもたちを、もう一度できあがった尺度で採点し直してみました。最初は159項目の質問で親御さんにチェックしてもらってありますから、より精選した100項目で調べ直したわけです。問題があってもなくても、とにかくごくふつうに暮らしている現代の子どもたちが、どのような行動の特徴を示すか、それが客観的にわかることになると言えます。

計算の結果、非常に興味深いことが明らかになりました。全員の尺度得点を出し、それを合計して、今度は916で割ると、各尺度得点の平均が出ます。平均点が高い尺度が、現代っ子の問題行動の特徴と言えるわけです。次の表を見てください。

表 916 人の尺度得点の平均

尺 度	平均得点
1 対人関係	2.950
2 会話・応答	2.108
3 行動抑制	2.691
4 自我強度	5.260
5 論理試行	2.893
6 言語表現	3.271
7 運動統合	1.730
8 神経統合	1.135
9 根気・持続	5.478
10 注意・集中	4.120

ダントツに高い平均値になったふたつを、太字にしておきました。それは順に「第9尺度 根気・持続」と「第4尺度 自我強度」です。ついで高かったのは、「第10尺度 注意・集中」です。根気と注意力は、かなり近い精神の働きと考えられます。根気がなく、自己が閉じこもろうとする殻が非常に固い、これが現代っ子の特徴であり、多くのお父さん・お母さんがそれを「困ったことだ」と強く感じていらっしゃるわけです。そういわれてみれば、いまの子どもたちの一般的な姿を思い浮かべたとき、思い当たるふしがたくさんあるようです。何となく印象として感じていたことを、客観的なデータとしてとらえることができる、ここに統計的な心理測定をおこなう意味があります。

2. どうして根気がなくなるか

「生きる力」

「少くらしいやでも、がんばり抜こう」という根気強さは、自己のこころ、つまり子どもの言う情動の働きだと考えられます。それは大きく見るなら、生き抜こうとする根源的な意識でもあります。この意識がしっかりとしていなければ、当然、心身の鍛練や知能の伸びは期待できないと言えます。

ここで連想されるのは「生きる力」ということばです。これは、文部省が、新しい教育のキーワードとして打ち出しました。新聞などのマスコミもけっこう取り上げ、読者のみなさんでもどこかで目にしたり耳にしたりしている方が多いだろうと思います。

文部省では、現代の子どもたちに「生きる力」がきわめて弱くなっていることを重大な問題と考え、今後の教育の中心にすえるべきことがらとして強く主張しています。それでは、文部省の考える「生きる力」とは、どんなものでしょうか。

日本の学校教育には「学習指導要領」というものがあることをご存じの方は多いと思います。これは、日本の公立学校（あるいは海外の日本人学校）であれば、どこへ行っても同じ内容を、同じ進み具合で教えていこうという、おおもとの取り決めです。各学校には「教育課程の自主編成権」というものもあるのですが、あんまり細かいことを言い始めると話が本題からそれてしまうのでやめておきます。

さて、「生きる力」について、学習指導要領には次のように書かれています。

「学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する中で、自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努めなければならない」。(第1章 総則)

たいへんかたい文章ですが、これだけでは「生きる力」が何なのかはわかりません。仕方ないので、「生きる力」について述べている別の文章を引っ張ってきます。読むのが面倒だという方は、とばしてくださってもけっこうです。

文部省の中に設置された、中央教育審議会(中教審)は、1996年に、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」という報告書を作成しました。これは例によって『文部時報』で読むことができます。この中から、「生きる力」に関係した文を抜き出してみます。

「我々はこれからの子どもたちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力や資質であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を[生きる力]と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた」。

このあとさらに、「生きる力」の具体的な説明がえんえんと続きます。これ以上のくわしいことに興味がおありの方は、ぜひ『文部時報』の平成8年8月臨時増刊号(1437号)をご参照ください。ご自分で買わなくても、備えている図書館は多いと思います。

さすがに、日本でトップレベルの頭のいい人たちが集まって練り上げた文章だけあって、

すきなく書き上げられています。私どもが重視している自己と他己のバランスが、ちゃんと盛り込まれています。（あ、これは自画自賛でしょうか？）

「総合的な学習の時間」

では、このような「生きる力」は、どうやったら育つと、文部省は言うのでしょうか。いろいろあるのですが、3つのポイントを指摘することができます。ひとつめは、子どもの生活に「ゆとり」を確保しようということです。時間的なゆとりもさることながら、精神的なゆとりがもっと大切だと書かれています。ふたつめは、知識を一方向的に教え込む教育から、子どもたちが自ら学び、自ら考える教育へ転換しよう、ということです。みっつめは、ふたつめのことの具体策として、「総合的な学習の時間」を作る、ということです。

「総合的な学習の時間」について、関心の高い読者の方が多いと思います。これの説明を始めると、またまた長くなってしまいそうですから、ほんの少しだけにしておきたいと思います。文部省はこの新しい授業で、国際理解・情報・環境・ボランティア・自然体験などのことについて、子どもが自主的に課題を見つけ、体験学習を大幅に取り入れることを勧めています。多くのお父さん、お母さん方の一番の関心事は、ひょっとしたら「小学校から英語が始まる！」ということではないでしょうか。実際、国際理解といえば英語の勉強、情報といえばパソコンの勉強、こんな感じになりがちです。

自己重視の教育

「総合的な学習の時間」は、まだ正式に始まっていませんが、文部省指定の実験校で試験的な取り組みがなされています。そして、学習指導要領にも、すでに規定されています。学習指導要領には、この教科の目的が、次のように書かれています。

(1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること

(2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること

文部省が言う「生きる力」とはこういうものだ、という考えと、この「総合的な学習の時間」の目的とを、比べてみたいと思います。すると気がつくのは、「生きる力」の説明で言われていた「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心」というのが、「総合的な学習の時間」の目的には見当たらない、ということです。重箱のすみをつついていっているように思われるかも知れませんが、この事実は重大だと思います。「総合的な学習の時間」の目指すのは、簡単に言えば、自分が「おもしろい」「やってみたい」と思った問題や課題を、トコトン追求する子どもです。意地の悪い言い方をすれば、おも

しろくないことは、やらなくていいわけです。「いかにおもしろい問題を見つけられるか」というのも、子どもが身につけるべき重要な能力というわけです。しかし、おもしろさや楽しさ、もう少し高級に言えば自分なりの「やりがい」、そうしたもののだけを追求していて、「生きる力」の重要なポイントとされている自律心、協調性、思いやりが、本当に育つのでしょうか。私どもは、大いに疑問だと思えます。感動する心は、まあ育つかも知れませんが。自分のしたいことだけをして、思い通りの結果が出れば、だれでも「やった！」と思えるでしょうから。

「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」というのは、別に最近になって突然言われ始めたことではありません。ずっとさかのぼれば、戦後、新しい教育が始まったときに、同時にこの考え方も取り入れられたと言えます。ですからこの思想は、50年以上の歴史をもっているわけです。

「自・自・自」と、この短い文を見ただけでも、「自」の字が3回も登場します。つまり、人間の精神で言えば、自己ばかり育てることをねらっていると言えるのです。

戦後、新しい教育が考えられたとき、当時の人々の根本にあった思いをまとめると、こんなふうに見えるでしょう。

「日本人には自我（あるいは自己）がなかった。だから一部の指導者の口車に乗せられて、愚かな戦争をしてしまったのだ。これからの日本人にとって一番大切なのは、とにかく自我を確立することだ。だれが何と言おうと『自分は自分！いいものはいい！ダメなものはダメ！』と強く言いきれぬ日本人を育てなければならないのだ」。そしてこれは、50年たったいまでも基本的に変わらない考えだと言えます。

そして50年後の今日、日本の子どもたちはどのように育っているのでしょうか。その問題点は、すでに実例をいくつもあげたとおりです。戦争こそ起きていませんが、状況はほとんど最悪に近いものです。

現在の教育や子どもたちの状況を見て、「われわれはどこで間違ってしまったのだろう」と嘆いた政治家がいましたが、私どもに言わせれば、どこで間違えたかは火を見るより明らかです。新しい教育のスタート地点で、自己を育てることにきわめてかたよったのが、そもそもの間違いなのです。

批判ばかり続けるのは気が引けるのですが、「総合的な学習の時間」が、いまのままの目的でおこなわれるとしたら、効果はほとんどあがらないと予想できます。それどころか、子どもたちの荒れがますます助長されるおそれすらあります。「人の心を感じるころ」を基本とする他己が、ここではまったくと言っていいほど考慮されていないからです。

不安をかき立てることだけ言うのはいけませんからここで付け加えておきますと、他己を育てる教育が学校現場でしっかりと確立されれば、自己を育てる教科とのバランスはちゃんととれるはずですが、教育に携わる人々は、このことを心に刻む必要があると思えます。

根気を育てるには

さて、もう一度子どもがとったデータに話を戻します。現代っ子が抱える最大の問題は「根気がない」ということでした。そうなった原因は、やはり子育てと教育にあると言えます。子どもたちの生活から、根気をためられる機会が、きわめて減っています。根気とは、少しくらい疲れていても、つらくても、我慢し、辛抱して、ひとつのことをやり遂げようとする心構えです。そもそも「我慢」「辛抱」などということが、子どもはおろか、大人の生活から消えているのが現状です。根気のない大人が、根気強い子どもを育てられるのでしょうか。

根気は、いったいどうすれば育つのでしょうか。スパルタ式にびしびし鍛えれば育つのでしょうか。ある程度までならそれでも可能だと思います。しかし、最終的に根気とは、自分自身で、どこまでもがんばっていかこうとする、自分を律する「自律」の心です。大人からぎゅうぎゅう締め付けられて、とにかくがんばる習慣が身につく、何年かはそれで持ちこたえたにしても、いつかはへたばるときが来てしまうのではないのでしょうか。古くから言われる、大学生の「五月病」などというのは、その典型です。両親や学校、塾や予備校からときにはおだてられ、ときには脅されて、アメとムチを与えられながら必死になって突っ走ってきますが、その強制力が突然、すべて取っ払われたときに、心が急にカラッポになってしまうのです。寝る間も惜しんで勉強したのに、それが根気という形で身に付くことがなかったのです。

では反対に、たいへんなことは何ひとつさせず、したいことを、したいときに、したいようにさせたらどうでしょう。しかしこれでは根気もへったくれもあつたものではありません。でも、いまの子育てや教育は、どちらかというところこちらの方にかたよってはいないのでしょうか。

先日、たまたまある幼稚園の保育風景を見る機会がありました。その日はミニ運動会で、近所のお年寄りが招待されていて、お父さん、お母さんの姿もちろほら見えました。先生が子どもたちを呼ぶと、手作りのかわいい入場門のところに子どもたちが集まります。しかし、そのときの呼び集める声が、ちょっと変わっていたのです。「はーい、次のゲームに出たい人、こっちへいらっしゃーい」。「出たい人」？、全員出るに決まっているんじゃないのかな、こう思っていると、本当に出る子と出ない子がいるのです。もちろん出る子の方が多かったのですが、出たくない子は集まらず、顔も向けずに土いじりやおしゃべりをしていました。そしてこれは、その日の全部のプログラムがそうだったのです。「したいことだけをし、したくないことはしなくてよろしい」、どうやらこういう教育方針が徹底していたようです。

幼児期も後半になってくると、子どもはだんだん第1次反抗期を抜けだし、大人の指示によく耳を傾けて、大人の期待する行動をとりたがるようになってきます。大人に依存したがる時期に入ってくるのです。その時期に「したくないことはしなくてよろしい。した

いかしたくないか、自分で決めなさい」、と、こういうしつけや教育がはたして適切でしょうか。この幼稚園の先生方には悪いのですが（別に悪い子を育てようとしていらっしやるのではないでしょうから）、これはきわめて不適切だと思います。「みんなとっしょに何かをしよう」という他己が、まったく育ちません。「最後までがんばろう」という根気はなおさら育たないでしょう。

大人の言うことに対して非常に敏感な時期に、「自分で決めなくちゃいけないんだ」あるいは「自分で決めていいんだ」、子どもはこんな風にばかり考えるようになります。他者に向くべき心が、全部自分にだけ向くようになるのです。自己が肥大し、他己が失われていきます。これこそ学級崩壊の根本原因と見なすべきです。

小学校に入った子どもたちは、さらに、自分ですべてのものごとを決める姿勢を求められます。「総合的な学習」は、それがもっともはっきりあらわれる教科です。「したいことをしなさい、したくないことはしなくてよろしい」、これが学校生活の基本なら、「先生の言うことなんて、聞きたくないから聞かない」、子どもがこうなるのはほとんど必然的な結果です。

スパルタ式の教育だけでも、自由放任主義の教育だけでも、根気は育ちません。子どもの成長の時期にあった、適切な統制と自由が必要なのです。子どもが育つ様子をよく見つけ、深い愛情を持って接すれば、無理やり抑えつけなくても言うことを聞き、ほったらかしなどという無責任なこともできなくなるはずだと思います。

根気のなさは、子どもがそういう問題を抱えていると同時に、多くの親御さんが「困ったことだ」と考えています。お父さん、お母さんが「うちの子は根気が足りないみたいだけど、まあ別にこれはこれでいいや」と思われているとすれば、私たちが調べたような結果は出ないのです。この問題を解決するために、われわれ大人はいますぐ行動を起こすべきです。

根気は、自己のこころである情動の働きである、と先ほど言いました。情動と感情はふたつでひとつのこころですから、子どもたちの他己「人の心を感じるこころ」が枯れてくれば、対になった情動＝根気も失われてくると考えられます。

欲望など、完全に自己に閉じた情動は、感情が枯れれば肥大してきますが、根気といったこころの働きは自己に閉じただけのものではなく、他者や社会に開かれているので、感情が枯れてくればっしょにへたばってしまうわけです。

自己の殻

さて、ここで問題になってくるのが、私どもの計算結果で根気に次ぐ高い平均値を示した「自我強度」です。これは、自己が閉じこもる殻の固さをあらわすものです。根気のなさとは、非常に密接な関連があると考えられるのです。

現代の子どもたちは、ほとんどが「自分がしたいことをトコトン追求しなさい」と教え

られます。「したいこと」とは、少しまともに言えば「問題を感じること」「興味、関心があること」です。もうちょっとくだけた言い方をすれば「おもしろいこと」「楽しいこと」ということです。極端なようですが、おもしろいことだけしていればよろしい、と教えるのと、ほとんど変わりがありません。

大人や社会に関心が向きがちな時期にそうわれれば、子どもは比較的素直にそれを受け取ります。そして、多くの子どもが他己を失いつつありますから、おもしろいことを見付けると、自分だけの世界に帰ってきて、自己に閉じこもることになってしまうと考えられるのです。

子どもたちは自己に閉じると、感覚的な刺激を求め、それを得ることで大きな満足を感じるようになる、こうしたことがよく起こります。またいまは、子どもたちのそうした欲求に訴える商品が次々と開発され、それが爆発的に受け入れられているのです。

その筆頭は、と言えばほとんどの方がピンとくると思いますが、テレビゲーム、あるいはパソコンゲームです。ロールプレイングゲーム（RPG）などは、ストーリーを追う、あるいは作るものですが、カラフルな画面、音楽、効果音などによって、やはり一番に満たされるのは感覚刺激を求める欲求です。別に知的な好奇心が満足させられているわけではありません。子どもたちはそれこそ何時間も、何日もゲームに没頭します。これは根気ではなく、一種の中毒と言えるものです。

今回の調査でアンケートに協力して下さった親御さんの中にも、「お子さんのことで困っていることがありますか」という記述式の質問に対し、「ゲームばかりしている」「1日何分まで、という約束をしてもぜんぜん守らない」「遊びに行っても、ゲーム恋しさにすぐ帰ってきてしまう」「やめるように言うと猛烈に反抗する」、このような悩みを書い下さった方々が、かなりいらっしゃいました。事態はかなり深刻です。これはゲームだけの問題ではなく、子どもたちが自己を閉じこめている殻が、相当固いことを物語っているのです。

根気は、人とのふれあいや、社会的な態度が試されるものです。この根気が足りず、これに耐えられない子どもたちは自己の中に逃げ込み、閉じこもります。その結果、自我強度がきわめて高くなると考えられるのです。こうした子どもたちを育ててしまったのは、われわれ大人です。私たちには、事態を解決する重い責任が課せられているのです。

すでに述べたことの繰り返しになりますが、子育てと教育に、深い愛に支えられた統制と自由を位置づけ、子どもたちに根気を育てなければなりません。

. 子育てと教育のストレス - どう向き合い、乗り越えるか -

高いストレス

この本の原稿を書いている時期に、東京で、35歳の主婦が顔見知りの2歳の女の子を幼稚園の敷地内で絞殺するという、衝撃的な事件が起こりました。新聞、テレビ、ラジオ、週刊誌は言うに及ばず、スポーツ新聞までもがこの事件に関する記事を連日報道しました。事実関係の報告だけでなく、学者や文化人、一般市民などが多数登場して、この事件をさまざまな角度から分析し、その意見が伝えられました。そこでもっともクローズアップされたのが、この主婦にとっては子育てや都会での人づきあいがきわめて大きなストレスだったのであり、その重圧に耐えきれなくなってあのような事件に走ったのではないか、ということなのです。

こうした中に見受けられたのが、親はあまり大きな精神的エネルギーを子育てに注いではない、という意見です。教育学者、心理学者、社会学者、あるいは小児科医といった専門家から、このような意見が出されています。このような人々の意見は、当然、世間に対し非常に強い影響力を持っています。有効な解決策として受け取られる可能性が高いということなのです。

手抜きをすすめる人々

その語るところをまとめると、次のようになるでしょう。親が子育てにばかり没頭すると、まずその過重な期待が子どもにとって負担になるので、反抗心や無気力を生みやすい。そして親は子どもとだけ向き合う密室に自らを閉じこめることになり、自分自身を世間から孤立させてしまう。その孤独感が、ますますエネルギーを子育てに向かわせることになり、その結果さらに親子関係が悪化するという悪循環が生じる。こうした状況をうち破るには、親が子育てに注ぐエネルギーを、もっと社会や対人関係に向けるべきだ。親がそこで自分の生きがいや本当にやりたいことを見つければ、孤独感やストレスが消え、親子関係は良好なものになっていくであろう……。簡単に言ってしまうと、親は子どもよりも自分自身を大切に生きてほしい、ということなのです。親が生き生きと楽しく生活していれば、子どもも勝手にそうになっていく、これで万事解決というわけです。

しかし、私どもは、こうした考え方には賛成できません。いままでも申し上げてきましたが、子育ての時期には、ありったけの愛情を子どもに注ぐべきです。自分のことは後回しにしても、すべてにおいて子どもを優先する、こういう一種の犠牲的精神で子育てにのぞむべきです。このような思いがないところに、子どもの幸せは決してありません。逆から言えば、こういう親の覚悟と根性が欠けているために、日本の子育てと教育がいま、非常に危うくなっているのです。子どもに向くべき愛情が、親自身に向いているために、多くの子どもが愛に飢え、心が痩せ衰えているのです。ここで紹介した専門家たちの意見は、

事態の悪化をますます促すものと言わざるを得ません。

さて、このような立場に立つ私どもですが、けっして現代のお父さん、お母さんが抱える心理的ストレスに無関心なわけではありません。「ストレスなど我慢してひたすら子育てせよ」などと乱暴に言うのではなく、むしろそのストレスの重要な研究対象としてとらえ、それを受け止め、乗り越えるためにはどうしたらよいかを探っています。

ここでは、そうした中から、私どもの共同研究者である木村みどり（現・香川県立高松養護学校教諭）と、亀井陽一（現・和歌山県龍神村立大熊小学校教諭）がおこなった研究をご紹介します。このふたつの研究は、どちらも障害があるお子さんをお持ちのお父さん、お母さんを対象にしたものです。こうした親御さんが抱える心理的ストレスは、健全なお子さんをお持ちの家庭とはある意味で比較にならないほど強く、深刻です。そこからわかることは、多くの家庭に無関係で特殊なものと言うより、望ましい親子関係、家庭のあり方を考える上で、むしろ一般のご家庭にとっても非常に参考になるものです。

1. 中塚のストレス尺度と自己・他己検査

母のストレス

最初に、研究に使われた、いわば「道具」を紹介します。一つめは、中塚が1984年から1985年にかけて作成した、お母さんの子育てストレスを客観的に測定することのできる「ストレス尺度」です。

それ以前にも、障害があるお子さんをもつお母さんの心理的ストレスは研究されていましたが、それらはほとんどが「お母さんにストレスがあるか、ないか」「お母さんがストレスを感じているか、いないか」という視点からおこなわれていたものでした。しかし、そうした研究だけでは、実際にお母さん方のストレスを軽くしたり、お母さん方の幸せの実現したりする、具体的な方法は生み出されてこなかったのです。そこで中塚は、ストレスの調べ方に問題があると考え、ストレスがあるかないかではなく、お母さん方が、実際の生活の中で、「どんなストレスを」「どれくらいの強さで」感じているかを調べることを計画しました。

そして、それまでの研究成果をふまえて、ストレスを質問するアンケート用紙を作り、お母さんの気持ちがその質問項目に「だいたいあてはまる」か、「すこしあてはまる」か、「あまりあてはまらない」か、「ほとんどあてはまらない」かを回答してもらいました。協力してくださったのは、知的障害、情緒障害、肢体不自由などの障害があるお子さんをおもちのお母さん方です。

集まった回答を学習障害の章でご紹介した「因子分析」という統計的手法で計算した結果、5つの尺度を作ることができました。それぞれの尺度は10の質問項目を含んでいて、

結局この尺度は全部で 50 個の質問項目からなっています。それぞれの尺度について、少しご説明します。

5つの尺度

第1尺度は「社会的圧迫感」です。これは、障害児をもつことにより、お母さんが世の中から大きなストレスを受けていることを示しています。ここに含まれる質問項目は、例えば次のようなものです。

「この子を社会の目からかくしたいと思うことがありますか」

「この子のことを言われそうで、奥さんたちのおしゃべりには入りにくいですか」

第2尺度は「養育負担感」です。これは、障害児をもつことでいろいろと手がかかり、母親自身の生活が乱されたり、家事が思うように進まないことなどによって、心理的な負担がかかっていることを示しています。ここに含まれる質問項目は、例えば次のようなものです。

「この子のことでイライラしたり、神経質になったりしますか」

「子どもの世話をするのがいやになることがありますか」

第3尺度は「不安感」です。これは、親の死後への不安をはじめとして、将来に対する不安や現実の生活上の悩みを示しています。ここに含まれる質問項目は、例えば次のようなものです。

「親が死んだあと、だれがこの子の世話をしてくれるであろうかと心配になりますか」

「この子のおくれはどうすることもできない気がして不安になることがありますか」

第4尺度は「療育探求心」です。これは、子どもの可能性を伸ばすために、少しでもいい治療や教育を受けさせてやりたいというお母さんの願いを示しています。ここに含まれる質問項目は、例えば次のようなものです。

「親としてこの子にもっとしてやるべきことがあるように思われますか」

「いま受けている治療・教育とは別のことを耳にすると、そちらをためしたくなりますか」

最後の第5尺度は「発達期待感」です。これは、子どもが何とかよくなってほしい、伸ばしきれていない能力がまだ何かあるに違いないといった、子どもの残された可能性への期待を示しています。ここに含まれる質問項目は、例えば次のようなものです。

「現在は発達がおくれているが、将来はおくれをとりもどすと思いますか」

「この子にはかくされた何か特別な能力があるように思いますか」

読んでいただくとおわかりになると思うのですが、第1から第3尺度まではお母さんにとってつらい、後ろ向きの、ネガティブなストレスを測るもので、第4と第5尺度は反対に前向きで、ポジティブな、望ましいストレスを測るものになっています。このことから、ひとくちにストレスといっても、そこにはネガティブなものとはポジティブなものという、あい反する（専門的には「アンビバレント」と言います）ものが両方含まれていることがわかります。

また、読者の方の中には、「ただでさえつらい気持ちでいるお母さん方に、まるで追い打ちをかけるようにこんな質問を浴びせるなんて、ずいぶん残酷な研究をしたものだ」とお感じになった方もいらっしゃるのではないかと思います。しかし、ストレスを軽くし、乗り越える方法を考えるためには、ストレスそのものに目を向けることがどうしても避けられません。ご協力くださった多くのお母さん方が、このことを理解してくださり、こころよく調査に応じてくださいました。

自己と他己を測る

さて、もうひとつの「研究道具」は、中塚が共同研究者と協力して1994年に作成した「自己・他己検査」です。この検査は、人々がふだん「自己」と「他己」のどちらを重んじて暮らしているかをたずねるアンケートを作り、おもに大学生に協力してもらって回答を集めて、それからいまままでと同じように因子分析により尺度構成をおこなってできたものです。この検査は6つの尺度からなり、それぞれの尺度には3つの質問項目が含まれています。これは数が少ないので、全部をご紹介します。

第1尺度 「欲望追求」

- 「よい家に住んで快適な生活をしたい」
- 「衣食住の経済的な満足を得たい」
- 「お金持ちになりたい」

第2尺度 「社会貢献」

- 「いつか社会的福祉事業をしてみたい」
- 「ボランティア活動をしてみたい」
- 「いつか社会団体に献金・寄付したい」

第3尺度 「他者志向」

- 「人の心が感じられる人になりたい」
- 「人の痛みがわかる人になりたい」
- 「人に思いやりをもてる人になりたい」

第4尺度 「出世追求」

- 「人よりよい成績や業績をあげたい」
- 「何でもいいから人より優れた立場に立ちたい」
- 「人に認められる人間になりたい」

第5尺度 「自己追求」

- 「より善い明日を目指して生きていきたい」
- 「自分の生きがいを見つけたい」
- 「自分の可能性にいつも挑戦する人でありたい」

第6尺度 「秩序尊重」

- 「与えられた役割は完全に果たしたい」
- 「人との約束は尊重したい」
- 「人の期待は裏切りたくない」

各尺度につけられた名前と、その内容をご覧いただければ、精神のどのような働きを測るものなのかはだいたいご理解いただけると思います。第1・第4・第5尺度は、自己を優先する生き方を、一方第2・第3・第6尺度は他己を優先する生き方を示しています。実際にこれをどのように用いるかですが、ここでは、「一対比較法」という心理測定上の方法がとられます。これはどういうものかということ、まず、ふたつの質問項目の組み合わせを作ります。例えば、第1尺度の「よい家に住んで快適な生活をしたい」との組み合わせを考える場合でしたら、同じ第1尺度の残りのふたつとの組み合わせは避けて、第2尺度から第6尺度までの15個の項目との組み合わせを作ります。そのときできる組み合わせのパターンは15通りです。質問項目は全部で18個あり、そこから2個ずつをとっていくわけで、ダブる分をけずると、すべての組み合わせのパターン数は $15 \times 18 \div 2 = 135$ 通りとなります。数学の授業みたいになってすみません。

この135通りの組み合わせを、一覧表にします。そして、ふたつの文を比べたときに、自分の気持ちによりびったりする方を選んで、印をつけてもらうのです。それから、組み合わせのうち、選ばれた項目には1点、選ばれなかった方には0点をつけて、18項目がそれぞれ何点ずつとったかを合計します。得点の高い項目(尺度)がどれかを見ることにより、生きていく上でその人がどんなことを目標にしているかが見えて来るというわけです。それを私どもは「価値指向性」と呼んでいます。

2. 中塚のストレス研究

子育てストレスの原因

中塚は共同研究者といっしょに、自分が作ったストレス尺度を使って、障害があるお子さんをおもちのお母さんが、日常生活でどんなストレスを一番強く感じていらっしゃるかを調べました。その結果、たいへん興味深いことがいろいろとわかったのですが、細かいことはここでは省略して（興味がおありの方は参考文献をご参照ください）、一般的な問題に広げて考えられる点をご紹介します。

まず、「1 社会的圧迫感」「2 療育負担感」「3 不安感」「4 療育探求心」「5 発達期待感」の5種類のストレスのうち、お母さん方が抱える最も大きなものは「3 不安感」でした。障害があるお子さんをおもちのお母さん方は、一般的に言って、常にお子さんに関する大きな不安を抱えながら生活していらっしゃる事がうかがえます。治療や教育に携わる方々は、お母さんの不安を和らげることを一番大切にしていきたいと思うのです。

また、調査に協力してくださった家庭のお子さんの障害は、4つのグループに分けられます。自閉症・脳性マヒ・知的障害・ダウン症です。読者の方々の中には、こうした障害についてくわしい知識をおもちの方もいらっしゃるかもしれませんが、さほどでもない方もいらっしゃると思います。この4つの障害についてくわしい説明を始めると、もうそれだけで1冊の本になってしまうので、ここでは省かざるを得ません。とりあえず話を先に進めてまいります。お母さんのストレスの高い低いと、これら障害の種類を照らし合わせてみると、ここに並べて書いた順番、自閉症からダウン症へ向かう順に、お母さんのストレスは低くなっていくことがわかりました。

この結果からは、次のようなことが考えられます。どの障害にも、重いお子さんと比較的軽いお子さんがいらっしゃるのですが、自閉症は、対人関係が結べないことがきわめて重大な症状としてあらわれます。この障害の場合、お母さんはわが子に接しても、願うような反応が返ってこないことが多いし、お子さんからお母さんへの働きかけもほとんど期待できないのです。とくにお子さんが小さいうちはこうしたことが激しい傾向にあります。反対にダウン症のお子さんは、人なつっこくて愛嬌があり、対人関係がとりやすい傾向があります。そのために、お母さんはお子さんとの絆を実感しやすいと思われる。こうして見てみると、お母さんとお子さんとの、十分なコミュニケーションをとれるかどうか（ことばのあるなしにかかわらず）が、お母さんのストレスを左右する非常に重要なポイントになると言えます。

「目は口ほどにものを言い」などと言うくらいで、コミュニケーションはことばがなくても十分に成り立ちます。ここで重要なのは、ことばのやりとり以上に、こころとこころのつながり合いなのです。その中でもとくに、「人の心を感じるこころ」である感情が大

切です。お母さんとお子さん、両方の「人の心を感じるころ」が十分に満たされたとき、一番深い幸せを、ふたりとも感じることができるのです。すべての子育てにとって、とても重要な点だと思います。

3. 木村の研究

コミュニケーションの大切さ

中塚の共同研究者の一人である木村は、中塚自身がおこなったお母さんのストレス研究をさらに発展させました。

中塚は自閉症・脳性マヒ・知的障害・ダウン症のお子さんをおもちのお母さんに協力を依頼しましたが、木村はさらに、お願いする範囲を耳、それから目の不自由なお子さんをおもちのお母さんにまで広げました。その結果明らかになったのは、一番高いストレスを感じていらっしゃるのは、耳の不自由なお子さんをおもちのお母さんで、その他は自閉症 知的障害 脳性マヒ ダウン症 視覚障害の順に、お母さんのストレスは低くなっていることです。

耳の不自由なお子さんとコミュニケーションをとるのは、たいへんなことです。とくにお子さんが小さいうちは、手話や筆談などの方法がとれませんので、ご両親の苦勞は察してあまりあるものがあります。お母さんは、「子どもとこころが通じ合った」という実感をもつのがとてもむずかしいために、このような結果が出たのだらうと予想できます。それが、自閉症のお子さんをおもちのお母さんを上回るほどのものだったとは、私たちの予想をも超えたことでした。ここからまた、医療や教育に携わる方々に考慮していただきたいことが出てきます。お母さん方が感じることの多いストレスの特殊性に十分配慮して、お仕事をすすめていただきたいのです。何よりも大切なのは、こころとこころのつながりなのです。

さらに木村は、この研究に協力してくださったお母さん方に、子育ての上でのストレスを、「どこで」「だれによって」「どんなふうに」解消したかをたずねる「ストレス解消アンケート」を回答してもらいました。そして、同じお母さんからのふたつの回答、中塚の作ったストレス尺度とこのストレス解消アンケートの結果を比較し、ストレスの高い低いと、ストレスの解消方法との間に関係があるかどうかを調べたのです。

この結果わかったことを大まかに言いますと、次のようになります。ストレスが低いお母さんは、夫をはじめとして家族や身内に自分の悩みや気持ちを聞いてもらい、それを主なストレス解消法にしていました。反対に、ストレスの高いお母さんは、お医者さんなどの専門家や、福祉事務所などの行政担当者に相談することによってストレスを解消する傾向がありました。

心の支え

この結果から考えられるのは、お母さんが子育ての上で心理的に安定していただけるためには、身近にこころの通い合ったあたたかい人間関係があるかどうか、非常に重要なキーポイントになっている、ということです。残念なことに、ストレスの高いお母さんは、家族などから心理的な支えを得るのがむずかしく、やむを得ず専門家や行政の担当者などに頼っているようです。しかし、そうした人々からの助言やサービスに、完全にお母さんの心に寄り添った、あたたかいものを期待できるかということ、現状ではむずかしい面もあります。それゆえ、お母さんのストレスは解消されず、それがアンケートの結果にもあらわれたと言えます。子育ての上での悩みや苦しみには、家族や身内からの、あたたかい心の支えがどうしても必要です。そのうちでも一番のものは、お母さんにとってはお父さん、お父さんにとってはお母さんと言えるでしょう。

愛し合う男女は赤い糸で結ばれているとよく言います。赤いかどうかはともかくとして、その糸は、まさにこころとこころをしっかりと結びつけている、見えない糸なのです。そして、お父さん、お母さんがお互いにこの糸を実感できるとき、おふたりともが安心して子育てに力を注げるようになります。そして、今度はお子さんとの糸を、しっかりとしたものにしていけるのです。

お母さんのストレスには、お母さん自身の努力で乗り越えることのできないものがたくさんあります。ほとんどがそうだと言ってもいいくらいです。お子さんに障害があるなしということに限らないようです。お父さんや、その他ご家族の支えが、どうしても必要なのです。

4. 亀井の研究

価値指向性

いままで「自己・他己検査」が出てこなかったのですが、ここでやっと出番が来ました。亀井は、中塚のストレス尺度と、自己・他己検査を組み合わせて、お父さん、お母さんの意識を研究しました。ご協力いただいたのは、84組の、自閉症のお子さんをおもちのご夫婦です。まず、お母さんには、ストレス尺度に答えていただきました。その後、お母さんとお父さんの両方に、自己・他己検査に答えていただきました。そして、お母さん自身のストレスの高い低いと、自己・他己検査によってわかる「価値指向性」、お母さんのストレスの高い低いとお父さんの価値志向性との関係を見ようと言うわけです。

検討の結果、かなりはっきりとした、興味深い結果が出てきました。それをご説明します。

お母さん方にストレス尺度を答えていただき、その結果を点数化して、ストレスの高い

傾向にある「高ストレス群」と、ストレスの低い傾向にある「低ストレス群」のふたつに、お母さんをグループ分けしました。ここまでは、木村も同じようにおこなったことです。

それから、自己・他己検査に答えていただき、ひとりずつのお母さんでストレス尺度と自己・他己検査の結果を照らし合わせてみました。そこで明らかになったのは、まず、高ストレス群のお母さんは、自己・他己検査の、第1尺度「欲望追求」と第4尺度「出世追求」において高い得点をマークする傾向があったことです。これは自己と他己を比べた場合、自己を優先させる傾向が強いことを示しています。

気になさる方がいたら悪いのですが、衣食住の満足や出世、お金もうけなどを追求し、エゴを主張すると、ストレスが高くなるのです。そして、お子さんに障害があってもなくても、子育てには多大な時間と、エネルギーが必要です。自己を優先したいお母さんにとっては、子育てが非常に心理的負担になるのです。つい「この子さえいなければ」と思ってしまいがちです。そうすればもっと仕事ができるのに、お金がかせげるのに、ラクができるのに……。こうした思いが高まると、お父さんとの衝突も生じることが多くなります。そして、ますますストレスが高くなり、その解消を、欲望の追求に向ける、しかし、欲望を完全に満たすことはできず、さらにストレスが高まり……。こうした悪循環が生じてしまうことが考えられます。

では、低ストレス群のお母さんではどうだったのでしょうか。ここでは、高ストレス群のお母さんと正反対の結果が出ました。つまり、第3尺度「他者志向」と第2尺度「社会貢献」で高得点をマークする傾向があり、自己よりも他己を優先するお母さんは、ストレスをあまり感じていないことが明らかになったのです。他者や社会に心を開き、多くの人と心を通わせようとしているお母さんは、強いストレスを感じていません。自分より他人ばかりを優先する人は、いつも「どうして自分ばかりソンをして……」と思っているのかと考えがちですが、事実は逆だったのです。

欲望に流されない

生き物の中で唯一、自己と他己というふたつの心をもつようになった人間は、他者と心がつながっているということを実感できるときだけ、本当の幸せと、生きている喜びを感じられる、こう言えます。ですから、他己を優先させる生き方をしているお母さんが、ストレスを感じずにすんでいるというのは、この、人間性の本質と照らし合わせて考えてみれば、ごく当たり前のことでもあるわけです。人間の幸せと生きている喜びは、心と心のつながりにあるということが、亀井の研究によって科学的に明らかになった、このように言うこともできます。物質的な欲望を満たしても、人の上に立つことができても、本当の幸せを得ることはできません。まるでイソップ童話の教訓みたいですが、これは心理学的な事実でもあったのです。

ここでつけ加えておきたいのですが、私どもとて、物質的な欲望や、社会的な地位を求

める生き方を悪いことと決めつけているわけではありません。いつもいつもひもじい思い、寒い思いにさらされているは、人を思いやったり、人に優しくしたりする気持ちのゆとりがなくなってしまうのは当然のことでしょう。社会的な地位も同じことで、常にさげすまれたり、しいたげられたりする立場におかれれば、平静な気持ちをもてと言う方が無理な話です。こうした欲求をある程度は満たそうと思うのが人間として当たり前の生き方ですし、またそうすべきだとも思います。気をつけなければならないのは、そうした欲望に執着すること、欲望を満たすことが生きがいのすべてになってしまうことです。他者の頭を踏みつけ、乗り越えてでも自分だけがいい思いをしようとする、これではとうてい人間本来の生き方とは言えません。残念ながら現代の日本、いや世界中のいたるところで、こうした醜い姿を見る機会が増えてきつつあるのではないのでしょうか。

お父さんの生き方

続いて亀井は、夫婦関係にも着目しました。お母さんのストレスの高い低いと、お父さんの価値指向性を照らし合わせてみたのです。

ストレスの高いお母さんの夫（お父さん）と、反対にストレスが低いお母さんの夫とでは、価値指向性（人生や日々の生活で、どんなことを目指しているか）に違いがあるのでしょうか。お父さんも、お母さんのストレスの高い低いに合わせて二つのグループに分け、自己・他己検査の結果を計算して、統計的に差があるかどうかを比較してみました。この比較の作業は、専門的には「検定」と呼ばれます。

この結果わかったのは、次のようなことです。まず、高ストレス群のお父さん（つまり、お母さんが高ストレス群に属しているお父さん）は、反対の低ストレス群のお父さんに比べ、第1尺度「欲望追求」と第4尺度「出世追求」の得点が高くなる傾向がありました。夫婦関係において、妻のストレスが高い場合、夫は欲望と出世を追求していることが多い、というわけです。

それでは、低ストレス群のお父さんには、特徴があったでしょうか。こちらのお父さんは、第3尺度「他者指向」と第6尺度「秩序尊重」の尺度得点が、高ストレス群のお父さんよりも高くなる傾向がありました。つまり、他人を気づかい、秩序（約束やルール）を守ろうと努力する夫がいると、その妻はあまりストレスを感じない、ということです。

欲望と出世を優先する生き方は、自己を優先させる生き方です。お母さんがこうだと、お父さんもこうなっているのです。反対に、他者や秩序、あるいは社会を優先する生き方は、他己を優先する生き方です。これもまた、お母さんがこうなら、お父さんもこうなっていることがわかりました。「他者指向」は夫婦で一致しましたが、お母さんは「社会貢献」、お父さんは「秩序尊重」と、若干の違いがでました。これは次のように考えられます。お父さんは仕事の関係で、何らかの組織に所属しています。もちろん仕事をされているお母さんもいますが、お父さんの場合はほとんど全員が仕事をもっていると考えていい

でしょう。組織を維持し、その中で仕事をしていくためには、組織内の秩序を尊重することがもっとも重要になります。したがって、他己を優先させるお父さんは、「秩序尊重」の得点が高くなったと考えられます。他己を優先させるお母さんの場合は、組織の秩序を尊重するというより、身近な人間関係を大切にしたり、あるいはボランティア活動に参加したりといったことが考えられるので、「社会貢献」の得点が高くなったのでしょう。

いずれにせよ、他己より自己を優先させる生き方は、夫婦のいずれにも高いストレスを生み出すことが明らかになりました。自己を大きくしようとすれば、ひとりで考え、ひとりで行動し、ひとりで問題を解決しようとしますから、当然他者には頼らなくなります。精神的な支えを、他者に求めなくなります。しかし、人間である以上、どんな人にも必ず他己がありますから、こうした人にも他己が完全になくなってしまったわけではありません。小さく縮んで、ほとんど働かなくなっていますが、それでもかろうじて残っています。他己の働きを、自己で代用することはできません。人間はどうしても、自己だけで生きていくことはできないのです。それは、土台なしで建物を建てようとするようなもので、いつ何時つぶれてしまうかわからない、非常に危うい生き方とすることができます。それでもなお、自分ひとりだけで立っていこうとすれば、その結果としてきわめて強いストレスが襲ってくるのです。

自己追求者の最期

他者のことをほとんどかえりみず、徹底的に自己を追求して生き、死んでいった人たちが、歴史の上でも大勢います。たとえば豊臣秀吉などはその典型と言えるでしょう。極貧の農民の子として生まれ、自分の才覚だけでのし上がっていった秀吉は、最終的に並ぶ者がいない強大な権力を手にしました。そしてその権力を、自分自身と豊臣家が末永く栄えるためだけに使おうとしたのです。まさに自己追求の権化です。では、世の中を思うがままに動かした秀吉の一生は、はたして幸せだったと言えるのでしょうか。秀吉の辞世の句は「なにわのことも ゆめのまたゆめ」という有名なことばで終わっています。どんなに栄華をきわめても、死にゆくときにはそれらがすべて夢のようにはかなく、むなしいものにしか思えなかったというのです。息子秀頼が一人前に成長できるのかどうかもわからず、この世に未練を残したまま、あがいて死んでいったのです。これが幸せな人間の一生であったと言えるでしょうか。

また、秀吉をも上回るスケールで自己を追求し抜いたのが、古代中国の王様、秦の始皇帝です。広大な国土を治め、なみいる諸侯を片っ端から服従させて、その頂点に立ちました。外敵の侵入に備えて長城を築き、後宮には何千人という美女をはべらせ、来る日も来る日も酒池肉林の大宴会。しかし、それほどまでの権力を誇った始皇帝も、忍びよる死の恐怖にはおびえました。始皇帝に逆らう人はひとりもいませんでしたが、同時に、始皇帝が抱える不安をやわらげてくれる人も、ひとりもいなかったわけです。そこで始皇帝は全

世界に使者を派遣して「不老長寿の妙薬」を探し出してくることを命じました。その使者が戻るまでの間も、始皇帝は死の不安にさいなまれました。そこで巨大な墓を作り、死後も自分を守ってくれる兵士の人形を何千体も作って中に納めました。それだけでは飽きたらず、何千人もの奴隷を道連れにと殺しました。時がたち、送り出した使者のうち何人かは戻ってきました。彼らが持ち帰った薬のうち、ひとつを始皇帝はとくに大切にしましたようです。始皇帝の死後、墓からその薬が発見されています。しかし、それは不老長寿の妙薬どころか、猛毒の砒素（ひそ）だったのです。始皇帝は、長寿を願いながら命を縮める毒薬をのんでいたわけで、これ以上皮肉な話があるでしょうか。結局始皇帝も、自己だけを追求したために、かえって不幸におちいって、哀れな一生を終えたと言えます。

欲望の渇き

現代人のストレスと、歴史上の人物のそれとを比較するのは、少々飛躍があるとお感じになるかもしれませんが、根底のところではあい通じるものがあると思います。人間の本当の幸せは、豊かな他己によって他の人々と心を通い合わせるところにあるのです。欲望を追求し、それが満たされても、その瞬間にはもう次の欲望への渇きが始まっています。満たしても満たしても、「もうこれで満足」ということはありません。追求し続ける限り、どこか満たされない思いが残り、それがストレスとなって襲ってきます。自分の欲望の追求はほどほどにし、それよりも他者を優先して生きることの方が、はるかに幸せへの近道を歩むことになります。自分が満足するよりも、「人様に喜んでもらえる」ことの方が、人間にとってはずっとうれしいことなのです。

生き方の追求

もうひとつ、亀井の研究によって明らかになった、とても興味深いことがあります。それは、低ストレス群のお父さんは、高ストレス群のお父さんに比べ、第5尺度「自己追求」の得点が高くなるという特徴があらわれたことです。このことは、いままで申し上げてきたことと矛盾するように思われるかもしれませんが、自分を抑え、他者を優先する生き方の方が、ストレスは低くなると言ったではないか、それなのに、ストレスの低いお父さんが「自己追求」に傾いているとはどういうことだ、おかしんじゃないのか、責任者出てこい、とまあここまではいかないでしょうが、いずれにしても何らかの説明は必要です。

これは、次のように考えられます。まず、「自己追求」に含まれる項目を再確認しておきたいと思います。それは次の3つでした。

- 「より善い明日を目指して生きていきたい」
- 「自分の生きがいを見つけない」
- 「自分の可能性にいつも挑戦する人でありたい」

これをお読みになればおわかりいただけると思うのですが、ここに含まれるものはどれも、出世やお金もうけ、名誉や権力を求める、世俗的な欲求をあらわすものではありません。そうではなく、「生きる意味」「人生の目標」といった、とても大きな価値を目指しているものと言えます。「こうありたい」という思いが、自分ひとりだけのものではなく、他者や社会に開かれているとも考えられます。自分だけに閉じこもった思いでなく、明るく、前向きで、希望を感じさせる願いであると言えるものです。

お父さんのこうした思いをあらわす「自己追求」尺度の得点が、お母さんが低ストレス群にいる場合は高くなり、反対に高ストレス群にいるときには低くなっているのです。

前に、東京での幼児殺害事件に関して、専門家たちが語ったことを紹介しました。そこで言われたことを繰り返すと、親が子育てに注ぐエネルギーを、もっと社会や対人関係に向けるべきだ、親がそこで自分の生きがいや本当にやりたいことを見つければ、孤独感やストレスが消え、親子関係は良好なものになっていくであろう、このようなものでした。この意見と、亀井の研究したお父さんの「自己追求」の意識とは、うまくかみあっているように見えなくもありません。しかし、両者が決定的に違いが点があります。それは、専門家たちが「子育てに注ぐエネルギー」を「自分の生きがいの追求」に振り向ける、と言っていることです。つまり、この人々は、「子育てより自分の生きがいを大切にしろ」と言っているわけです。しかし、亀井の調査に協力していただき、「自己追求」を重んじていらっしゃるお父さん方は、決して子育てより自己追求を優先しているではありません。子育てに注ぐエネルギーと、自己追求への情熱が、完全に一体化しているのです。子育てを通して感じる悩みや苦しみ、そして喜びが、自己追求への情熱をさらに燃やしていると言えます。そして、自己を追求することによって高まった人間性が、子育てをよりよいものにしているのです。その結果、家庭に幸せがもたらされ、お母さんのストレスはグンと低くなっている、このように考えられます。育児は多少手抜きしてでも、自己を追求しよう、などというのはダメです。そんなものは、苦しい現実からの「逃げ」にしか過ぎないのであって、一時的にホッとできて、すぐその後に倍増した苦しみが襲ってくるのです。救命ボートで漂流する人が、のどの渇きに耐えられずに海水を飲むようなものです。

望ましい夫婦のあり方

以上述べてきたことをまとめると、幸せに生きていける、望ましい夫婦関係のあり方が見えてきます。まず、お父さん、お母さんが、ともに自分自身の欲望の追求はほどほどにして、それよりいつも社会に心を開き、他者のために何かをしてあげたいと思っている、こうした夫婦であれば、おふたりとも精神的にかなり安定し、お互いの関係も良好なものになるだろうと考えられます。そして、お母さんはとくに、夫や子ども、それから世の中の人々に対してやさしく、ほがらかに接したり、細やかな気配りをしたりすることが望ま

しいようです。いつでも、周りの人たちをあたたく包み込むようなお母さんであっていただきたいのです。一方お父さんは、仕事や社会的な立場の中で、あるべき自分の姿を見据え、そこに向かって力強く前進していく姿勢をもつことが望まれると言えます。もちろん、お父さんとお母さんが助け合い、支え合うのが大切なことは言うまでもありません。とくに人間は、「人の心感じるこころ」によって、他者とのこころのつながりを実感できることが、生きていく上で何よりも大切なことですから、この世でお互いに一番近い存在である夫婦が、いつもコミュニケーションをしあい、こころとこころを通じ合わせているのは、幸せな夫婦関係を築く上でこれ以上はないくらい大事なことです。

こうした家庭には、必ず「愛」があります。そして、深い愛に包まれてこそ、子どもは幸せに、健全に育っていただけるのです。

蛇足ですが、ここに述べてきたようなことを、男女の性差にこだわって家庭内の役割を固定しようとするものだ、とお受け取りになる読者の方が、もしかしたらいらっしゃるかもしれません。しかし、私どもは決して根拠のない思いつきや、自分勝手な独断的意見を申し上げてきたのではありません。あくまでも科学的なデータにもとづいて、幸せな家庭と子育てのあり方について、提言をおこなってきたのです。このことは、お読みになれば十分おわかりいただけるだろうと信じております。

・「情育」の実現に向けて

幸せの実現

いままで申し上げてきたことは、私どもの基本的な考えと、その科学的な根拠です。最後にこれらのことをふまえて、「子育てと教育はこれからどうあるべきか」「われわれは何をなすべきか」という、具体的提言をおこないます。どれほど理論的にすばらしいことを言っても、それが実現不可能なものだったら、あるいは、この世に生きる人々の幸せに役立たないものだったら、しょせんそれは「絵に描いた餅」に過ぎないのです。私どもはその壁を乗り越えて、この本を締めくくりたいと思います。

1. 情動の共有

自己と他己の揺れ

まずは乳幼児期からの子育てについて考えていきます。第2章「子どもの育ち方」で説明しましたように、子どもの精神は、自己と他己の間を交互に揺れながら育っていきます。大人が無理にし向けなくても、子どもはみずからのうちに、そのような成長の可能性をもっているわけです。そしてそのプロセスは実にうまくできていて、その自然な流れにしたがっていけば、大人になるとときにはちゃんとバランスのとれた人間性が育つようになっています。ですからわれわれ大人が一番に心がけるべきなのは、子どもの育っていく道筋を頭に入れて、子どもの心に寄り添ってかかわることです。

簡単に振り返っておきますと、1歳くらいまでは、精神のうちとくに自己が育つ時期ですから、親は全面的に子どもを受け入れ、献身的にお世話をしあげます。両親の愛情ある世話を受けることにより、子どもの心に「自己信頼感」が育ちます。その後、1歳から2・3歳くらいまでの間は他己が育つ時期で、関心が大人の方に向いてきますから、基本的な生活の習慣を大人中心の姿勢でしつけてあげます。「統制」を加える大切な時期です。そしてこれは無理じいをしなくても可能です。この統制により、子どもの心に「他者信頼感」が育つのです。ここまでで、子どもの精神的成長は自己と他己の成長期を1回ずつ通りました。

2・3歳から5・6歳までは、自己が育つ時期で、第1次反抗期と呼ばれます。このときには、親や保育者はどちらかという子ども中心の態度であたたく包み込み、見守る姿勢をとってあげます。十分に「自由」を認めてあげるのです。このことにより、自律性、主体性、能動性が育ちます。次は小学校時代です。再び大人の言うことに関心が向いてきます。親や先生は権威をもって、社会的なふるまいや、望ましい態度を教えてあげます。それから手伝いや仕事に積極的に参加させ、我慢すること、辛抱すること、一生懸命働くことなどの大切さを、身をもってわからせます。それでこそ、自分が、人や社会のた

めになる「善い人」になれることを教えるのです。ここまでで再び、子どもの精神は自己と他己の成長期を1回ずつ通りました。

続く中学校から青年期まで、12・13歳頃から26・27歳頃にかけては、第2次反抗期で、強烈に自己が育つときです。親はあれこれ指図をするのではなく、子どものよき理解者となり、みずからが子どもに手本を示してあげます。こうして子どもは大人の仲間入りをしていきます。

小学生の「反抗期」

ここで、学習障害のアンケートを集めていたときに受けた、衝撃的な印象についてお話しします。アンケートは、小中学生の保護者の方をお願いしたのですが、その中でとくに小学校1年生から4年生くらいまでのお子さんをもつ親御さんが、記述欄に「うちの子はいま反抗期で・・・」というようなことを書いてこられたのです。それも2人や3人ではありませんでした。記憶をたどってみると(アンケート用紙の山をひっくり返せば正確にわかるのですが)、たぶん20人以上はいらっしやうに思います。まだあどけなさが残っているであろう、小学校低学年～中学年のお子さんたちが、「親の言うことをまったく聞かない」「母親に向かってババア、死ね、などと暴言を吐く」「暴れ出すと手がつけられず、何をしてくさかわからない」「親を殴ったり、蹴ったりする」とおっしゃるので、特別なお子さんについて聞いたものではありません。どこにでもいるお子さん、どこにでもあるご家庭について、アンケートをおこなったのです。「学級崩壊に続いて、とうとう家庭崩壊が始まったか」という感じでした。中学生や高校生の家庭内暴力は、もう何十年も前から深刻な問題でした。それは、一種病的なあらわれとはいうものの、思春期や第2次反抗期の行動特徴のひとつとして了解することが可能だった、と言えます。ところがいまでは、似たような現象が小学校低学年のうちからみられるのです。

小学校期に本格的な反抗期が始まるなど、少なくとも従来の児童心理学の常識では考えられません。しかし、その考えられないことが、日本の学校で、家庭で、多発しているのです。アンケートのお答えだけで、すべてがわかるわけではありません。ご家庭によって事情がさまざまでしょうし、お子さんの荒れの程度にも、違いはあるだろうと思います。しかし、従来の常識が通用しないことがいろいろと起きていて、その問題が表面化していることも事実です。

親の覚悟と根性

ありのままををお答えくださった保護者の方を批判するようなことを書くのは、まことに心が痛むのですが、やはり、乳幼児期の子育てに問題があったと考えざるを得ません。自己と他己が、正常に発達してこなかったと言えると思うのです。

原因としては、子どもの精神的成長のプロセスを無視していたのではないかと、いうこ

とが考えられます。その中でも、まず、子どもの自由を尊重すべき幼児期後半、すなわち2・3歳から5・6歳の第1次反抗期に、あれこれと指図をしたり、子どものしたいことを禁止ばかりしていたのではないかと考えられます。この時期、活発に動き回る子どもを見守っているのは、なかなか骨の折れることです。けがをしないか、事故にあわないか、心配の種は尽きません。また、自分で何かチャレンジしても、失敗することが多いので、最初から親が手を出してしまった方が、よっぽどものごとがさっさと進みます。生まれたての赤ちゃんのお世話も、ひたすら我慢と忍耐の連続ですが、この時期にも、以前とはまた違った忍耐が親に要求されます。親にしてみれば「いっばしの口をきくくせに、親が手伝ってあげなければ何にもできない」としか思えないことが次々と起こるのですから、ついイライラとして何から何まで口出し、手出しをしてしまったり、叱りとばしたりしてしまいがちだと考えられるのです（もちろんそうでない親御さんも多いことと思いますが）。こうした気持ちにブレーキをかけるのは、親の、子どもに対するひたすらな「愛」にほかなりません。この愛とは、「何としてでもこの子を一人前の、きちんとした人間に育てなければならぬ。それができるのは親であるこの私だけだ」という気迫であり、覚悟であり、根性です。それがあってこそ、親はじっと自分を抑えて子どもを見守ることができるのです。

愛でしつける

また、もうひとつのこととして、1歳を過ぎた頃の他己が育つ時期に、適切なしつけがおこなわれなかった可能性も考えられます。離乳、うんち、おしっこ、歩行、おしゃべりなどの基本的な生活習慣がしつけられるのが、この時期の子どもにとって大切な課題ですが、それは単に「できなかったことができるようになる」ことだけが重要なわけではありません。そうしたしつけを通して、子どもが親の教えを素直に聞き入れるようになる、という、親子の心の結びつきができることがもっとも大切なのです。現在ではどちらかと言えば、いつおっぱいとサヨナラできたか、いつおむつがとれたか、いつ歩けるようになったか、よその子はできたみたいだけどうちの子はまだだ、ということで、とにかく「できるようになること」ばかりが目指される傾向がないでしょうか。もちろん「できなかったことができるようになる」のは大切なことです。しかし、しつけの基本は親子の心の結びつきにあります。それが忘れられたまま、やれ歩け、それ食べるという調子で子育てがされたとしたら、子どもの幸せな成長は望めません。心の結びつきもまた、お父さん、お母さんの深い愛があってこそ、しっかりとできあがっていくものです。また、「できる」ことばかりを目指すのと同じくらい、いやそれ以上に怖いのが、お父さん、お母さんのしつけに対する無理解、無関心です。しつけをしようにもうまくいかない、というのではなく、最初からしつけをする気がなく、する必要性を感じていない、こういうことは、いまの若い世代のお父さん、お母さんの間に広がりつつあるのではないのでしょうか。私どもの杞憂

ならばいいのですが、マスコミの報道などからすると、一部とはいえそういう事実はあるようです。近頃の児童虐待に関するニュースには、「ネグレクト（育児の怠慢・放棄）」ということばがよく出てきます。本来かなり特殊な用語だったのが、ごく一般的なニュースの中に登場するようになってきているのです。子育てに愛があるのは当たり前、というのはもはや過去のことになり、子育てに愛を取り戻すのが現代社会の課題になっています。

情動の共有

さて、乳幼児期の子育てでは、何を基本にするべきでしょうか。いろんなことを申し上げてきたので、読者のみなさんの頭の中も少々混乱しているかも知れません。ここで一度、すっきりと整理しておきたいと思います。この時期、一番に求められるのは、親子の心、いや「こころとこころ」の結びつきです。私どもが使っている「こころ」ということばには、情動と感情がありました。このうちでもとくに、お父さん、お母さんの情動と、お子さんの情動が結びつくことが、とても大切なことです。それはつまり、お子さんが喜んでいることには、お父さんお母さんもいっしょになって、心から喜んであげることです。反対に悲しんでいれば、その悲しみをお子さんと分かち合ってあげることです。このことを私どもは「情動の共有」と呼んできました。この、情動の共有の体験が、小さなお子さんの精神発達の上では、もっとも大切なことです。親子が情動を共有することにより、まずお子さん自身の情動が満たされます。それから、自分と同じ思いをしてくれる他者、自分の思いに寄り添ってくれる他者の存在を実感できます。そして、そうした他者に、信頼と愛情を感じるができるようになります。これが「人の心を感じるこころ」、つまり感情として根付き、育っていくのです。人間はだれしも、無意識のうちにこの感情をもって生まれてきますが（それが人間の人間たるゆえんでした）、子どもは、情動の共有の体験を通して、その感情を意識レベルのものとして再獲得できるのです。情動の共有の体験がなければ、感情は無意識の闇の中に埋もれて、その輝きと働きを失っていきます。そして、人の心が感じられない子どもになっていってしまうのです。

お父さん、お母さんとお子さん（あるいは先生方とお子さん）がいっしょになって大いに喜び、ときには悲しみながら、明るく楽しい、あたたかな雰囲気の中で生活していくことが大切です。それを基本として、お子さんの自己と他己の揺れに気をつけながら、ときには統制を加え、ときには自由を認めてあげれば、お子さんはのびのびと子どもらしい、しかも感情が豊かで素直な性格に育っていくことと思います。

情動を共有し、それを基礎にして感情を豊かにはぐくむこと、これがこの本のタイトルにもした「こころを育てる」「情育」の根本です。

2. 大人の権威を

子どもの「権利」

幼児期までにこのような子育てがなされれば、小学校に入る頃にはお子さんの気持ちは再びお父さん、お母さんの方に、あるいは学校の先生の方に向いてきます。そうすれば、ことさら子どもに対して高圧的に迫らなくても、子どもたちの目には自然と大人が権威あるものに映るようになると考えられます。

いま、「子どもの権利」に関する議論がさかんです。「子どもの権利条約」ということばや、その条文そのものを目にしたたり耳にした方は多いと思います。たしかに、子どもにも権利があると言えるでしょう。しかしそれは、大人が守ってあげるものです。大人が深い愛情をもって、権威ある姿勢で子どもを導いてあげるならば、子どもが自分で自分の権利を主張しなければならない必要はどこにもないと、私どもは考えます。

現在の状況は、反対になってしまっているのです。大人が子どもたちに愛を与えず、大人自身の権威は地に落ちてしまった（と言うより、大人がみずからそれを放棄した）ために、子どもたち自身が権利を主張しだした、と言えます。どうしてこうなったかという、実は現代社会を支えている基本的システムである「民主主義」の考え方が、こうした状況を生みだし、支えているのです。

民主主義にひそむ危険

民主主義制度は、個人の自由と権利を最大限に保証しようとし、そこでは一人ひとりがみな、同等で、対等な立場に立っています。親子とても例外ではありません。親であろうと子であろうと、人間として同等であり、対等なのです。民主主義は、人と人とのつながりを重視しません。むしろ逆に、個人個人をバラバラにし、それぞれの人が自分だけの力で立ち、他者に頼ることなく生きていくことを要求します。そこでは、個人と個人が支え合い、助け合う仲間としてではなく、お互いに攻撃しあい、奪い合う存在として、対立をするようになってきます。しかし、非力な人間がお互いに力を合わせずに生きていくことはできないので、そこから「契約」というものが生まれます。別にお互い信じ合っているわけじゃないけれど、協力しなければ何にもできないので、とりあえず契約を結んでおいて、その範囲内だけで力を合わせることにしよう、しかし不都合が起きたときには我慢しないでサヨナラだ、また新しいパートナーが見つかるさ・・・、こう書いてしまうと身もフタもない感じですが、民主主義にもとづく人間関係の本質とは、こういうものなのです。こうした契約関係が、親子関係すらも支配しかねません。ですから、子どもの権利主張が起こってくるのです。契約関係の基本は、ギブ・アンド・テイクです。こっちはこれをあげるから、そっちはそれをくれ、ということです。親子関係がギブ・アンド・テイクになったらどうなるでしょう。「ここまでおまえのことを育ててやったんだから、老後

の面倒をみるのは当たり前だろう」、たとえばこういう要求が起こって来はしないでしょ
うか。それに対する子ども側からの反発は、こんなものが予想されます。

「冗談じゃない、だれがアンタに育てて欲しいって頼んだんだ？勝手に生んで、勝手に
育てておいて、その上恩まで着せられたんじゃないよ。アンタこそオレのおかげ
でいろいろといい思いをしたんじゃないの？面倒みてもらいたいのはこちらのほうさ」。

あまりにもすすさんだ会話を再現してしまいましたが、いまの日本で、似たような状況は
少なくないようにも思えます。親が子に与える愛情は、ギブ・アンド・テイクであっては
ならないのです。あえて言うならそれは、ギブ・アンド・ギブ、どこまでもひたすらに与
え続けるものです。見返りはいっさい求めない、無償の愛でなければなりません。

読者のみなさんにとっては、こんなところで民主主義批判に出会うとは、思ってもみな
なかったことだろうと思います。そして、だいたいにおいて民主主義を批判するような人間
というのは軍国主義者か、もしくはファシストと相場が決まっていますから、私どもに対
する信頼も、ここへ来て一気に崩れ去ってしまったかも知れません。民主主義にケチをつ
けるような人間が、子育てと教育の本を書くなんて、それこそ世も末だ、こんな風にお感
じになる方が、ひょっとしたらいらっしゃるかも、と思います。

しかし、現代民主主義に対する私どもの認識は、決して間違いではないと思います。そ
れをくわしく述べることはこの本の使命ではありませんので、これ以上はひかえておきま
すが、この問題はいつか必ず別の機会に明らかにしたいと考えております。

子どもに仕事を

さて、ここでの本題は、親子関係が同等、対等なものになってしまった、ということだ
す。こういう状況になって、子どもが親に対してどんな自由でも主張できるようになった
ということは、子どもの幸せのために貢献しているのでしょうか。現実はずっと正反対で
す。日本の子どもたちは、世界で最低の規範意識しかもたず、他己は枯れきって、見かけ
の立派な体格とはうらはらに、心は痩せ衰えています。われわれ大人がいまこそ子どもを
救うべく行動を起こさなければ、手遅れになる時期はもはや目前に迫っています。

では、具体的にわれわれは何をするべきなのでしょう。幼児期までの子育てについて
は、「情動の共有」こそが一番大切なことだ、と申し上げました。では、小学校以降の時
期において、子育てには何を大切にしたらいいのでしょうか。もちろんひとつにしぼるの
は容易なことではありませんが、あれやこれや言ったのでは具体的提言になりません。あ
えてひとつのことを申し上げると、すでにふれたことでもあるのですが、子どもたちに労
働をさせることです。ここで「アナタ方は児童福祉法を知らないんですか！」などと言わ
れると困るのですが、私どもは何も子どもから教育の機会を奪って過酷な重労働をさせよ
うと言うものではありません。教育の一環として、子どもに、実際自分の身体を動かして働
くことを体験させるべきだと思うのです。

ゆくゆくは学校教育制度の中にこうしたカリキュラムを位置づけるべきだと思います。しかも、「総合的な学習の時間」で考えられるような、自分でしたいことを見つけてしたいようにする、という、失礼ですがそんな「なまぬるい」ことでは何の役にも立たないと思います。仕事がつくても、疲れても、つらくても辛抱してやり遂げなければならない、そういう厳しさを味わわせるべきです。ここでねらうのは他己を育て、鍛えることですから、自分は我慢してでも人のために尽くさなければならない、それでこそ自分が「善い人間」になっていけるのだということを、身をもって体験させることが大切です。

こうしたことが学校教育の中で実現されるまでには、越えなければならないハードルがいくつもあると思います。しかし、家庭教育、子育ての中でおこなうのであれば、制約は一切ありません。お父さん、お母さんの気持ちひとつで、すぐにでもできることです。

農業が教えること

そこでおすすしたいのが、農業を家庭の中に取り入れることです。農業、というのが大げさすぎるなら、ぐっとやさしく家庭菜園、畑仕事と言い替えてもけっこうです。

農業が子どもに与える教育的効果には、計り知れないほどすばらしいものがあります。まず、自然と徹底的にふれあうことができます。土を掘り返し、石をどけ、種をまき、草を抜いて、いつも手をかけてあげなければ作物は育ちません。人間の主体的な努力が試されるとともに、人間が自然によって「生かされている」存在であることを、肌で感じることができます。自然を守ってやる、保護してやるという、どちらかと言えばごうまんな姿勢では、自然はわれわれに恵みを与えてはくれません。われわれはあくまでも、「生かされて生きている」存在なのです。こうした謙虚な思いが、他己の基本です。

アウトドアブームにのって、オートキャンプをしたり、野外料理を楽しんだりするのはもちろんけっこうですが、それはあくまでも「消費活動」であることをわきまえている必要があると思います。消費とは、つまり欲望を満たすためのものです。人間は当然、生きていくための基本的な欲望を満足させる必要がありますが……。自然とこうした関わりしかしていないのでは、謙虚さはなかなか育っていかないのではないかという心配があります。消費することよりもっと大切な、生産活動に携わっていく必要があると思うのです。

それから、ご家族で、あるいは子どもたちが仲間同士で、みんながともに汗を流して働くことによって得られるのは、まさに情動の共有体験です。みんなで一緒に働き、しんどい思いをし、うまくいかなければみんなでガッカリし、あるいはみんなで収穫の喜びを分かち合う、幼児期に親子で味わった緊密な情動の共有体験が、さらに大きく、社会的な場に関われていくのです。ここで子どもたちは、他者と苦楽を分かち合い、「人の心を感じるころ」を育てていくことが期待できます。人間の生きる幸せは、「人様」に喜んでもらうこと、人の喜びをわが喜びとして感じられることにある、生きる上で一番大切なこのことを、まさに体で覚えていけるのです。

また、農業には、さまざまな知識と、技術が必要です。子どもの手には負えないことがたくさん出てきます。大きな石を動かしたり、木の根っこを掘り返したりすること、適切な植え付けの時期を知ること、消毒をすること、大量の収穫物を車で運ぶこと・・・、中にはお母さんですら無理なものがあり、お父さんが一手に引き受けなければならない場合が出てきます。子どもはこうした光景をまのあたりにして、生きていく上では人それぞれが役割をもっていること、集団にはリーダーやルールが必要であり、それらに従わなければものごとがうまく運ばないこと、などを切実なこととして学んでいきます。そこでは、黙って働いているだけで、親や大人、リーダーの権威が自然ににじみ出てくるのです。高圧的なことばや態度で、無理に子どもを服従させようとする必要は、ないと言えます。

世界の流れの中で

さらに、完全な自給自足は無理だとしても、だれもがある程度の食料を自給できるように努力していくことは、世界の将来を展望すると、子どもの教育だけでなく、大人自身の生き方、人類全体の生存のために、ぜひとも必要であると言えます。ここまで来ると、問題は農業の専門家、経済の専門家の守備範囲に入ってくるのですが、少しだけ意見を申し上げます。

いま、日本の食糧自給率は、世界でも最低に近いレベルにあります。おもに工業の発展によって日本は世界トップの経済大国になり、金の力にものを言わせて世界中から食糧を輸入しています。とくに発展途上国からは、日本円にすればタダ同然のきわめて安い価格で、食べ物を買付けしています。現代は日本にとって、わが世の春と言えなくもありません。しかし、こうした状況は近い将来必ず破綻します。WTO（世界貿易機関）の交渉の行方などに、その兆候がすでにあらわれ始めています。世界的規模の貿易不均衡がいま以上に表面化し、そのバランスが崩れたとき、自国の食糧生産能力が非常に低い日本は、外交の上で最も弱い立場に立たされます。食べ物をめぐる世界的な争いが起きれば、日本はそこで主導権を握ることができないのです。そうすると、われわれの生活に何が起こるでしょうか。お米が10kg 3万円、小麦粉1kg 5千円、大根1本2千円、キャベツ1玉3千円、タマネギ1つ千円、牛肉1kg 10万円、こんなことになるかも知れません。「そんなバカな」と言われると思います。私どもも、これが空想であってほしいと願います。しかし、こうしたことが絶対に起きないとは、だれにも言い切れません。それどころか、起きる可能性の方が高いとも言えるのです。

こうした、将来起こる可能性がかなり高い危機を乗り切るためには、日本はこれから先食糧の輸出入をだんだん制限して、自給自足の体制を整えて行かざるを得ません。食糧が自給されるようになれば、いまのように安いものを外国から買うわけにいかなくなりますので、程度はどうであれ、食べ物の値段は必ず上がります。そうすると、われわれ一人ひとりが、ある程度の食糧自給体制をもっていることが非常な強みになります。

幸い、いま家庭菜園がブームになっています。われわれはこのブームに、静かな危機感を加えて、家庭での農業を暮らしに定着させていくことが必要だと思います。

意識の改革を

子育てと教育から、話がだいぶそれてしまいました。しかし、根底ではつながっています。われわれはいま、子育て、教育、生活のあり方、社会の見方、こうしたものすべてに関して、一大意識改革を迫られているときなのです。基本は、いままでのような自己ばかりを追求する「自己社会」から、他己を大切にする「他己社会」への転換をはかることです。それが成功するかどうかは、子育てと教育にかかっています。子育てと教育において、いままで述べてきたような「情育」が具体化すれば、人類は希望ある将来への一步を踏み出すことができると、私どもは信じています。

おわりに

この本の原稿ができあがる頃、新聞にこんなニュースが載りました。

アメリカでも、子どもたちの不登校はきわめて深刻な社会問題になっており、それへの対策として、常習的な子どもの無断欠席を容認している保護者に対しては、禁固刑を適用するように法整備がすすめられている、というものです。アメリカに不登校児の保護者への罰則規定はいままでにもありましたが、ついに禁固刑という「伝家の宝刀」が抜かれることになったわけです。例としてデトロイト市の状況があげられていましたが、ここは全市の人口が約百万人、そして小中高生の人数は約 18 万人で、そのうち 3 分の 1 に当たる 6 万 3 千人が不登校に状態にある、と書かれています。本文で、日本の不登校児の数が現在 12 万人あまりになっている、と述べましたが、アメリカではデトロイト市だけで、日本の全不登校児の半分にあたる子どもたちが、学校へ行かなくなっているのです。なるほどこれならば、「日本の不登校児はたった 12 万人しかいない」と言う方が出てきても、いっこうに不思議はないと言えます。

親を刑務所に入れてでも子どもを登校させようという強硬姿勢の背景には、不登校が銃乱射事件などの非行（と言うより凶悪犯罪）の温床になっているおそれがある、こうした危機感があります。アメリカ社会が非常に危険な側面をもっていることは、ずっと前からよく知られていることですが、その深刻さは、やはり日本の常識をはるかに超えるものがあるとと言えます。

では、日本の子どもたちの現状はアメリカに比べて「マシ」なのでしょうか。とてもじゃありませんがそうは言えません。事例は本文で紹介したとおりです。日本の子どもたちの規範意識は世界最低レベルで、精神は非常に病んでいるのが現実なのです。

不登校に対するアメリカ当局の強硬策は、成功するでしょうか。ある程度の成果は出るかも知れません。しかし、これが根本的な対策にならないことは、だれの目にも明らかです。一時的に不登校児の数が減っても、将来、もっとすさまじい形で反動が来る可能性は大いに考えられます。けがをして、傷口が化膿してきたときに、「とにかく傷をふさいで隠しておけ」とばかりにバンソウコウを貼りまくったり、包帯をグルグル巻いたりしたらどうなるでしょうか。ますます傷が悪化することは、子どもにだってわかります。しかし、アメリカのしていることは、まさしくこれと同じことです。状態は好転せず、かえって悪くなるということは、おそらくアメリカ国民のだれもが感じていると思います。それでも、とりあえず何かをしておかなければなりません。根本的な治療はできないけれど、とにかく血を止め、膿が流れるのを防いでおかなければならないのです。そしてこれは、根本的に傷をいやす手当ではありません。

それしかできないのは、根本的な治療ができない、もしくは治療法を知らないからです。では、根本的な治療法、つまり対策とは、何なのでしょう。それはまさしく子どもたち

の精神を正しくとらえ、対応することにほかなりません。子どもたちの精神がどうなっているかを見ずに、親への締め付けをきつくしても、それは大けがをしたところに汚れたバンソウコウを貼り付けておくようなものです。子どもの精神を正しくとらえることの大切さは、不登校問題に限ったことではありません。いま見られるすべての問題、そして、たとえ問題がなくても、あらゆる子どもの幸福、福祉と安寧のために、われわれ大人が最も基本にするべきことなのです。これは、大人にとって、生やさしいことではありません。場合によっては、いままでの快適な生活を捨てなければならないのですから、相当な覚悟と、根性が要求されます。しかし、いまあえてそれをしなければ、近い将来人類は悲劇を迎えることになると言えます。悲しいことですが、誇張でも何でもなく、これが事実なのです。

本書では、私どものこうした考えを、いろいろな角度から説明してきました。かなり有効で、具体的な提言ができたのではないだろうかという期待もありますが、残された課題はあまりにも大きいという思いをぬぐい去ることはできません。

しかし、なすべきことの山を前にして、ため息をついている暇はありません。より善い明日を目指し、私自身の自己と他己の統合を念じながら、一步一步歩みをすすめてまいりたいと思います。

参考文献リスト

中塚とその共同研究者の業績は、いままでに相当なものが蓄積されてきています。ここには、そのうち、本書にとくに関連が深いものを載せておきます。本書の内容と重なる部分も多くありますが、より学術的、理論的に書かれています。関心がおありの方は、ぜひご参照ください。

- 1 「障害児をもつ母親のストレスの構造」 中塚善次郎 和歌山大学教育学部紀要（教育科学編）33巻（1984）
- 2 「障害児をもつ母親のストレスの構造（ ）」 中塚善次郎 和歌山大学教育学部紀要（教育科学編）34巻（1985）
- 3 「障害児をもつ母親のストレス要因（ ）」 蓬郷さなえ・中塚善次郎・藤居真路 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要1巻（1987）
- 4 「障害幼児に対する両親の養育態度要因とその両親間における類似性」 中塚善次郎 教育心理学研究（日本教育心理学会）36巻2号（1988）
- 5 「N式自閉傾向測定尺度の作成とその利用 - 自閉症研究、教育に対する一提言 - 」 藤居真路・中塚善次郎 発達（ミネルヴァ書房）32号8巻（1987）
- 6 「N式自閉傾向測定尺度と自閉症教育プログラム - 自閉症研究、教育に対する一提言 - 」 藤居真路・中塚善次郎 発達（ミネルヴァ書房）33号9巻（1988）
- 7 「障害幼児をもつ母親の養育態度 - 障害種別による差異 - 」 蓬郷さなえ・中塚善次郎 小児の精神と神経（小児の精神と神経学会）28巻4号（1988）
- 8 「障害児をもつ母親のストレスと家庭における夫婦の役割分担について」 中塚善次郎・蓬郷さなえ 鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）4巻（1989）
- 9 「自閉症児の家庭教育」 中塚善次郎・大西久男・蓬郷さなえ・原田和幸 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要3巻（1989）
- 10 「家庭における父母の養育態度と子どもの情動表出行動」 蓬郷さなえ・中塚善次郎 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要3巻（1989）
- 11 「ワロン理論による自閉症児・障害児理解」 中塚善次郎・原田和幸 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要4巻（1990）
- 12 「新しい障害児『響育』理論の確立をめざして」 中塚善次郎・松田文春 鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）5巻（1990）
- 13 「幼児の情動表出尺度の構成」 蓬郷さなえ・中塚善次郎 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要4巻（1990）
- 14 「障害児響育要諦 - 教師と親のための指針 - 」 中塚善次郎 鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）6巻（1991）

- 15 「自閉症児の情動表出行動の特徴 - ダウン症児と精神遅滞児との比較 - 」 中塚善次郎 発達障害研究 (日本発達障害学会) 15 巻 1 号 (1993)
- 16 「情動・感情の教育 - 同和教育における意義 - 」 清重胎一・中塚善次郎 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要 7 巻 (1993)
- 17 「人間精神の心理学モデルによる精神病理の解釈」 中塚善次郎 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要 7 巻 (1993)
- 18 「障害を持った子どもの母親のストレス - 障害認知時のストレスの構造と規定要因の検討 - 」 大西久男・中塚善次郎・宮崎令子 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編) 8 巻 (1993)
- 19 「人間響育要諦 - 教師と親のための指針 - 」 中塚善次郎 鳴門教育大学実技教育研究 3 巻 (1993)
- 20 「哲学を取り戻すべき心理学 - 人間「精神」の心理学構想 - 」 中塚善次郎 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編) 8 巻 (1993)
- 21 「人間精神学序説 - 自他統合の哲学的心理学の構築とその応用 - 」 中塚善次郎 風間書房 (1994)
- 22 「『ユング心理学』ノート - 自己・他己理論を通して見えたもの - 」 中塚善次郎 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編) 9 巻 (1994)
- 23 「精神分裂病の基本障害と諸症状 - 自己・他己理論による了解の試み - 」 中塚善次郎 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要 8 巻 (1994)
- 24 「自己・他己検査の尺度の構成」 赤尾泰子・中塚善次郎・金山貴美子 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要 8 巻 (1994)
- 25 「障害児 (者) をもつ家族」 中塚善次郎 教育と医学 (慶應通信) 42 巻 5 号 (1994)
- 26 「知的障害者に人格の完成はあるか」 中塚善次郎 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編) 10 巻 (1995)
- 27 「自己・他己双対理論に基づく人間精神発達理論 - Stern 理論の検討による細密化」 中塚善次郎 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編) 11 巻 (1996)
- 28 「障害児教育を支えるコミュニケーション () - 『コミュニケーションとはなにか』自己・他己双対理論に基づく検討」 中塚善次郎・上松育代・木村みどり・大田雅美 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要 10 巻 (1996)
- 29 「障害児教育を支えるコミュニケーション () - 重度・重複障害児教育と障害児をもつ親の援助に関する文献の検討 - 」 上松育代・木村みどり・大田雅美・中塚善次郎 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要 10 巻 (1996)
- 30 「障害児教育を効果的にするためのコミュニケーションの研究 () - 自閉症児の時間障害を理解するための時間論の構築 - 」 中塚善次郎・大田雅美・大向裕美・木村みどり・上松育代 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要 11 巻 (1997)

- 31 「障害児教育を効果的にするためのコミュニケーションの研究() - 同名論文()
で構築した時間論による自閉症児時間障害の理解 - 」 大田雅美・木村みどり・
大向裕美・上松育代・中塚善次郎 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要
11 巻 (1997)
- 32 「自閉症児における左半球障害新仮説の提示 - コミュニケーション障害の脳生理
学的基礎をより深く理解するために - 」 中塚善次郎 鳴門教育大学学校教育研
究センター紀要 12 巻 (1998)
- 33 「時間性の学としての倫理学 - 自己・他己双対理論による革新 - 」 中塚善次郎
鳴門教育大学研究紀要 (人文・社会科学編) 13 巻 (1998)
- 34 「人権問題に関する基礎的研究() - 若干の哲学的・「人間精神学」的考察 - 」
中塚善次郎・岩井勉・佐々木博人 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要
13 巻 (1999)
- 35 「『人権と平等論』ノート」 中塚善次郎・小川敦 鳴門教育大学学校教育研究セン
ター紀要 14 巻 (1999)
- 36 「障害児をもつ母親のストレスと社会支援」 小川敦・木村みどり・中塚善次郎
鳴門教育大学学校教育研究センター紀要 14 巻 (1999)
- 37 「こころの教育論」 中塚善次郎・小川敦 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編)
15 巻 (2000)
- 38 「学習障害児の教育実践における問題点とその克服」 小川敦・中塚善次郎 兵庫
教育大学連合大学院学校教育学研究科教育実践学論集 1 巻 (2000)

不許転載